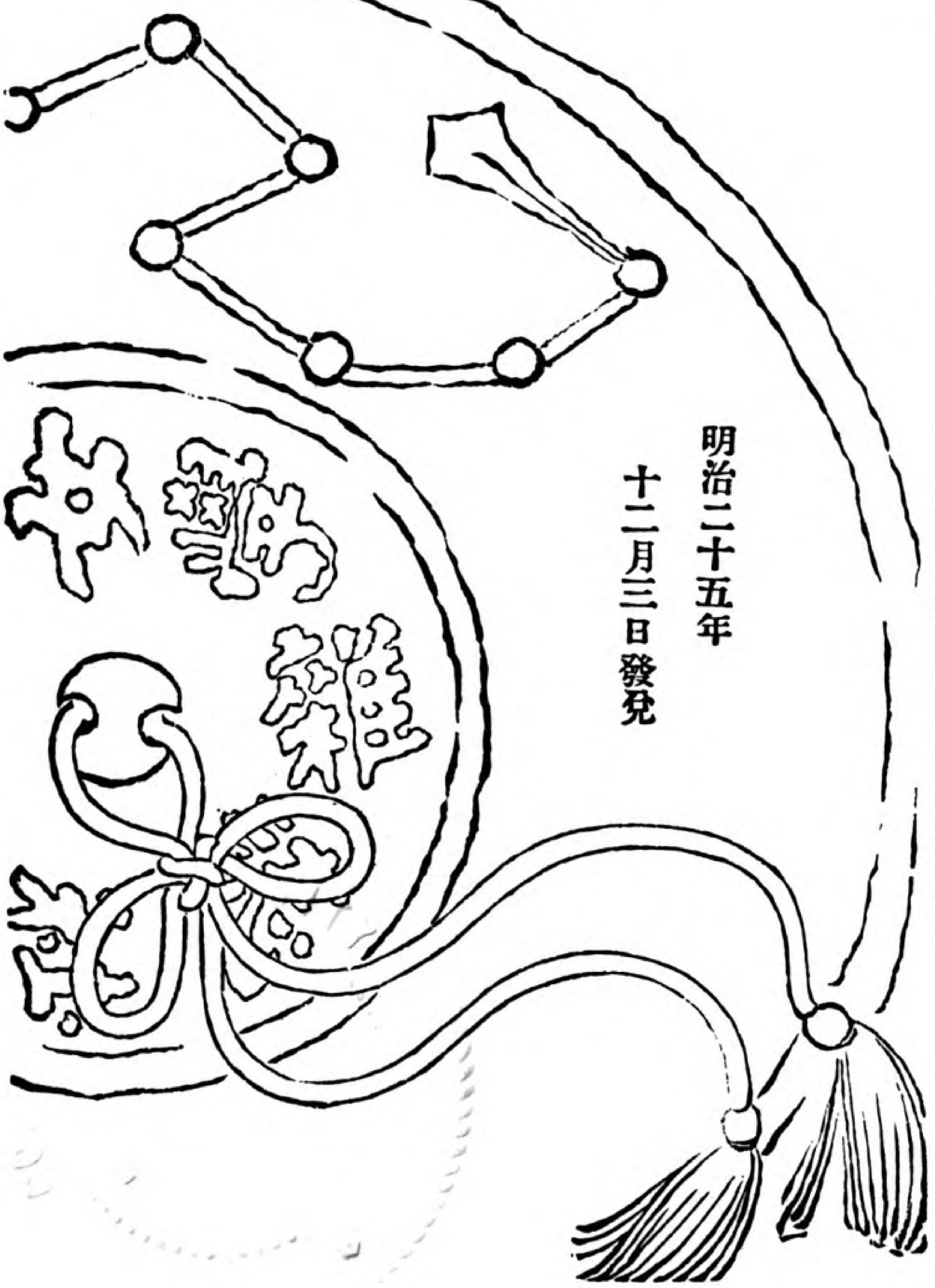
Vol 1892
no.333-1

女學雜誌

第三百三拾参號

甲の巻



明治二十五年
十二月三日發兌

注意

社説青年一揆張本人は活火、慷慨、急激、大有爲の眞價値を論明し、青年純誠の氣象の發源を表明す些さか、時弊に中る。道話空漠々たりやさ題する第二の社説は時事を論ぜずして道話を常にする吾黨の精神を告白し道話果して空漠々なりや其實効果して直接ならずやさ論ず第四議會。河野文部大臣。土佐傳道の三篇皆な社説たり。共に一讀を促すの權ありさ自信す。批評欄内甚はだ豐かにして、大久保甲東、河村瑞賢、地震家屋、日本建築構造改良法、日本外史さ讀史餘論、罪さ罰、忍耐の秘訣、第五版地理學講義、大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評、等皆な精讀細査の后に成る尋常無責任の輕評さ異なる。摘要には、修身書採定の標準、支店分家出張所、北海道改革、万國赤十字第五集會報告略、自由黨の海軍擴張論、酒精輸入增加、福澤諭吉氏の道德論、現内閣さ後藤某、等皆な時文中尤さも見る可き者の精髓を拔摘し一集す時事欄内には、伊藤伯傷つく、此老翁憫れむ可し、國民政社、新大學惣長、漁夫の利、文部省改革、非職郡長自殺、敕任布衣、攻擊さ設計、大日本圖書會社の利益、書籍製造的學者、毎日新聞の古今佳話等あり、固より壯言大語して獨り喜ぶ者にあらず、超然優然さして時事の流行を概察し、自からにして感激する所のもの自からにして筆端より流るゝ耳、知己の一讀を要めん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 333. DECEMBER 3rd 1892.

EDITORIAL:—Ringleaders of Youthful Mobs. Are Moral Lectures of No Use? The Fourth Parliament. The Minister of Education. Evangelizing Tosa.

CRITICAL NOTES:—

MISCELLANEOUS:—The Man and the Nation. The Reformer and the Evangelist. Reforming Work in Japan. True Humility. The Just Man and the Man of Love. The New Life of Suffering. Resignation Chastity Toward the Divine Being. Reverence. Great Men and Their Lovers. The Ideal Character. Moses the Man of Faith. Pure Love.

CURRENT EVENTS:—

FRAGMENTS:—

本號（第三百三拾三號）目次

●社説　青年一揆の張本人○道話空漠々たりや○第四議會○河野文部大臣○土佐傳道

●批評　大久保甲東○日本外史と讀史餘論○河村瑞賢○地震家屋○日本建築構造改良法○罪と罰○

●摘要　忍耐の秘訣○第五地理學講議○大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評○武道の發源○修身書採定の標準○支店分家出張所○北海道改革○万國赤十字第五集會報告略○自由黨の海軍擴張論○酒精輸入増加○福澤諭吉氏の道法論○現内閣と後藤某

●雜錄　人と國○改革者傳道者○日本改革○眞正の謙遜○義の人愛の人○哀苦の新生○あきらめ○神に對する節操○日本の諺と呂蒙の言○尊敬心○偉人と墓心○人物上の理想○信仰の偉人モーセ○純潔の愛

●時事　伊藤伯傷つく○此老翁可憐○國民政社○新大學惣長○漁夫の利○文部省改革○非職郡長自殺○敎任布衣○攻擊と設計○大日本圖書會社の利益○書籍製造的學者○毎日新聞の古今佳話

●片々

前週（第三百卅二號）赤表

○社説　宣教師派女學校に一策を獻す（下）。

○家政　嫁と姑（ふみ子）○家内重實錄（同）○黄金の砂二つ三つ（女護嶋見集）○乳母の撰擇法（上）ふみ子　○母公へひさこと（牧の童）。

○雜錄　今昔もの語り（上手の覺悟）○醫師の識量○近きを捨てゝ遠きを學ぶの弊　○婦人の撰擧權問題。

○摘要　烟草は出火原因の一　○小野のお通　○女子敎育と裁縫科○宗教と女學校。

○理學　習慣と用不用との力○身體の變化が互に相關する事○遺傳○淘汰の法。

○文藝　バイロン卿の曼弗列度を論す（上）○和歌數首（東京案山子・迺舍社中）。

○批評　婦人立志篇の序　○前田正名君、亡女に告ぐる文○女子國文○なぐさめ草

○時事　孤女學院　○湘煙女史

○女報

○孤兒之友

前々週（第三百卅二號）白表

○社説　社會問題一卑見

○史傳　博士ヘボン氏自叙傳

○雜錄　職工軍團創立の精神（伊藤爲吉、安東太郎、江原素六、高田早苗、大熊氏廣、巖本善治）○禁酒會の歌○ゆきだをれ（韻文）透谷子

○論説　武道の發源（中）武士道と武藝の開發（天知子）

○批評　大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評（雲峯子）○千代田城大奥○今古雅譚○名家尺牘文集

○寄書　押川方義君（山月子）○其筋の御方に御質問仕候（熱海にて一書生）○雜感（日本の社會、學者多きを憂ひず、人を批評するは即ち自らを批評する也、亡き母）秋玉庵記

○時事　教科書撿定の秘密漏洩○東洋自由黨○北海道開拓の所謂る大計畫○賭博刑廢止運動○牛疫傳播○贈正四位○田島晴雄○品川彌二郎子○信用組合○千島探撿○教育國立期成同盟會

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百卅三號　明治二十五年十二月三日發兌

社説

青年一揆の張本人

洋海と雖ども濤なければ腐る、巨人と雖ども意氣なければ死せるに等し。意氣は夫れ激波の如きか。猛然として一昂すれば、乾巖を呑み、防壁を超ゆ、落然として一沈すれば、深底を洗ひ、九谷を曝す。此の變化は活動なり、活動は生命なり。變化活動なき時は、天地暗澹四面枯死せるに同じ。人生何の面白きとあらんや。

然れども、濤は到底水の變にして、水の常に非ず。意氣は要するに心の動にして、其の定靜にあらず。故に變を論じて常とし、動を見て本性と爲す時は誤まれり。其動を欲するものは、靜を思ひ、其變を好むものは、常を念せずんばある可らず。花に戯むれて、根を忘るゝは狂蝶なり。遊に迷ひて、安息を知らざるは兒子のみ。達觀の士は、惣じて本源に入りて深察する所ろなかる可らず。

近日、青年の爲めに論ずる者を見るに、多くは、狂蝶、兒子の戯むれを爲す。知らずして、斯の如しと言へば、其短なるを非とす、夫子倘先づ暫らく脩養せざる可らず。知つて而して、斯の如しと言はゞ、其信ならざるを不可とす、其人遠からずして自から穿てる穴に陷いる可し。吾黨は双つ乍ら之を悲しむ。

聞よ、今の青年論を爲すもの丶言を。口を開けば言ふ、活火、慷慨、急激、大有爲と。其言、壯大、頗ぶる人耳を悦ばすに足る。聞くもの喝采して壯んなりとし、言ふもの揚々として英雄らしとなす。

古來人を誤まるの言行は、大率ね此に類するの煽動による。着實なる議論は、耳くもの亦着實に辨ず、故に誤ること少し。利己なる議論は、氣節ある人傾聽せず、故に血ある人を誤まるとなし。但だ彼の慷慨悲憤せる大言壯語は、尤とも多く可憐なる多血多感の好士人を動かし、彼等をして狂然奔然として之に趣むかしむ。飜つて靜かに其理因を考ふる時は、多くは皆な空動徒勞に歸するものなる耳。

人多く「感動」の語を好用す。感動は實に貴事なり、天下の大事未曾て感動の末にあらざるはなし。然れども、感動は大事を爲すの門にして其堂にあらず、先づ眞謀は此の堂奥に於て決定せられずんばある可らざる也。故に、感動は沈靜せる理解の後に來る可し。たとひ理解の前に來るとも、其事に發するに當ては、必らず先づ一と度び理解を經たる後ならずんばあるべからず。然るに、今の辨士論客、只管らに人の感動力に向つて訴へ、聽者讀者亦單一に感動の多少を以つて好惡す。

彼の、活火、慷慨、急激、大有爲等の說を以て靑年を鼓舞するの輩中、古のマーク、アントチーにあらずば、近代のブーランゼーたるもの尠らず。悲しい哉、吾國の靑年、骨あるものは羅馬人の如く、血あるものは、佛蘭西人の如し。屢ば容易に激して、而して靜かに思慮することなし。此故に、每度彼輩煽動者に利用せられて憫れむ可きの最後を遂ぐ。

夫れ火あらずんば燒くこと能はず、人間活火なくして能く何事をか爲さんや。慷慨とは、火氣の煙也、急激とは火氣の流也。活火あるの人、安くんぞ、慷慨なきを得ん。慷慨するもの安くんぞ急激ならざるを得ん。既に、火あり、茲に慷慨あり、既に慷慨あり、茲に急激の言行あり、以て大ひに爲す有るべし、之を靑年の事業とす。故に、吾黨は、活火、慷慨、急激、大有爲等の說を揚言して靑年が臨時の參考に供するの事を目し、常に之を不可なりとするものにあらず。たゞ唯一に此等を指明して靑年修養の目的となさしむるを以て大ひに誤まれりとなす耳。

火は能く燒くの力あり、然れども火は自から燃ゆるものに非ず、火の燃ゆるや必らず薪炭あり。薪炭を供えずして茲に火を擧よと云ふものあらば、命を聞くものは遂に線香花火にても擧るの外あらざる可し。彼の靑年を說くに、活火、活火と云ひて、而して活火の何如にして擧り、活火の何如にして燃ゆるかを說示せず、亦此活火を炎々たらしむるに必要す可き素元養材を供するの方を敎訓せざるものは、遂に靑年をして、空元氣に勇み、僞慷慨に猛り、氣違ひぢみたる偏僻を以て急激なりと會得し、野心勃々たるを以つて大有爲の事と自認せしむるに至るもの也。近來俄かに空元氣の自稱英雄蕃殖したるは亦此種の培養に由れる也。

先覺者が一言一行は、意外の地に波及す。追從の徒は、大率ぬ文字に偏よりて精神を忘る。偶像禮拜の迷ひは、人の何人にも免ぬかれがたきものなり。故に、主動者は、尤とも謹愼し、兩端を叩き、本源を穿ち、事物の眞髓を明示して、人の誤解し易きを預防す可し。主動者の言行は、之を目耳せしむるよりも、寧ろ之を味あはしむべし、之を咏あはしむるよりも、寧ろ自から工夫せしむべし。工夫は開發なり。故に眞正の開發的敎育なるものは、不言不行の裏に行はると多し、ルツソウが所云る自然に放任すとは即はち是れ也。

故に、青年を鼓舞するには、活火說を以てするよりも、先づ活火の本源を與へざる可らず。活火の本源とは何ぞ。他なし。青年の心胸を至誠にし、天道人情に切ならしめ、敬神愛人の念ひに滿たしむるの生命を活かす、是れ也。此の生命にして先づ活潑ならば、たとひ久しく冷靜にして些々の火氣を升さざるとあるも、一度び事に當り物に觸るれば、炎然として燒騰す、たとへば、深山幽谷の樹木、白晝尙ほ露滴點々として凉氣四面を襲ふ、地下百丈の炭石、万千の年期世より埋れて塵土と相伍したるも、一旦時來れば火氣熱發して天を燒くの猛炎となるとの何の雜作もなきに均し。左れば、强からんとを欲するものは、先づ直からざる可らず。自ら反りみて疚しからずば、千万人と云へども、尙ほ勇往すべく、省思して內に顧みる所あらば、億兆喝采の裏に尙ほ心怯するとあり。故に、大勇士は、律義の人なり、俊傑英豪は必らずや道德的なり、內に至誠滿ち、神を敬し人を愛するの情豐かならずして、果た何ものに激し、何ものにか動く可き。先づ此等の素養なくして、而して活火ありと云ふものあらば、そは僞裝の聲色使ひ也、左れば、慷慨悲憤は、發情の末、活火急激は、意氣の流也、此等の末流を說きて、本源に反らず、人をして單に源なきに滔々たらしめんとする時は、遂に人をして僞はらしむるの外あらざる可し。

最后、一言を遺す。青年諸子、漫に慷慨するなかれ、慷慨は願はしきとにあらず、止を得ざる也、慷慨は樂事にあらず、苦胸斷腸の事なり。青年諸子、漫に活火を誇ると勿れ、火あるは、火なきに若かず、マッチは燃やすが故に減り、炭は燒くが故に減ず、之を消すは、之を積むに畏れぞ、諸君先づ、其の薪炭を貯はふ可し。青年諸子、徒らに、大有爲を望むと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勿れ、人、何事をも爲さゞるの決心ありて而して后ち大ひに爲すあり、大有爲は、至誠止を得ずして立つの人能く之を爲す、空に計畫し、平地に波を起し、押し出さるゝにあらず、引出さるゝに非ず、野心猛々、功名勃々として、以て大ひに爲す有らんとを欲せば、之れ何をも爲さゞる也。ナポレヲンが一生、世に益ありしと云ふは歴史家之を許す。蓋し世に益ありしならん、その益ありしは、悪魔が道德に益あるに同じ、左れば、世に益あると彼に益あるとは異なる。ナポレヲンが、初年の至誠なる愛國心を失ひし以后遂に大有爲の事を廢せりと云ふべし。有爲とは、必らずしも外面に爲すの義にあらず。心外、心裏、有形、無形、其象異なると雖ども、其揆一也。人の一生の大有爲とは、先づ人德を立つるの義是耳。

道話果して空漠々たりや

或人來り勸めて曰く、公等、何んぞ時事を論ぜざる、漠然たる道話遂に活世界に實益なけんと。吾黨答へて曰く、不肖、時事論の必要を知らざるに非ず、又其壯快を覺らざるに非ず、但だ、其暇なきを如何んせんと。或人難じて曰く、漠然たる道話を說くの暇ありて、而して直接に時事論を爲すの暇を欠くと云ふものは奇怪なりと。吾黨辯じて曰く、今や我邦は、根底の大改革を要す、浮表の細雜作を以て安んず可きにあらず。病膏肓に入れり、微少の外科醫療を以て治す可きにあらず。而して、大改革方案中の結果最とも有効に影響最とも宏大なる者は、夫れ道德上の事にある乎。惟ふに、今の政治界、今の敎育界、今の經濟界に於て、策の改む可く、方案の更ゆ可きもの千百倘ほ足らざる可し。然れども、之に若し道德の空氣を吹入れ當路者の心を一新するとを得ば、策は依然として元の如く、方案も因循として故の如くなるとも、其功果は飜然として更新改善す可し。其感化影響するとの至大にして迅速なる斷じて他に如此きものはあらじ。凡そ、改革には、人を替ゆ、然れども、人皆な同腐する時は、人の心を替ゆるより法なし。今の政治論、暴を以て暴を伐ち、源家を以て平家を倒さんとすると異ならず。如此き改革を幾度すとも、日の下に新しきとあらず、歳々櫻花ちりゆきて、年々人相同じからば、遂に我神洲を何如にせんや。此故に、道德上の改革は、其事甚はだ漠然たるが如くして、其事極めて直接あり。

もし此事にして早く行れば、目下世上の紛雜は如此く甚しからじ。政費節減は、何の故に行はれざる、責任內閣は何の故に行れざる、皆是れ道德上の問題にあらずや。賄賂事件、弄花事件、敎科書密約事件等は、皆是れ道德上の問題にあらずや。現今政海人をして難ましたる大問題の過半は、皆な道德上の問題にあらざるとなし。故に、今にして道話を說くは、單に漫然として百年の後を期するにあらず、實に目前の時事に慨するによるのみ。人は彼の道話の人を目して實際に迂なりとして笑はんか、道話の人は、反つて世の實際家を見て其近眼なるを痛まんとす。笑ふも、痛むも、之を隨意とす。但だ吾黨嚴然として深く信ずる所のものは、今時に於ける道德上大改革の時機極めて切迫せるの一事是れ也。見よ、今の世、一世の人心を淸化するの名儒ありや、是れ德川氏時代にも劣る所ろ也。見よ今の世、王佐を以て任じ、至誠國民をして疑がはしむる所ろなき國士幾人ありや、是れ支那國の歷史にも恥る所なきを得ず。語を寄せて、四方の謹嚴敬虔なる同人に告ぐ。むかしは伊藤仁齋、滋賀の海の波、漂渺として靜平なるを見、公平無私の巨德に感じて則はち大儒たらんことに決意せり。諸君、今の國情の騷々雜々なるに歎じ、彼の富岳の雪白く、太平洋の波平らかなるに羨やみて、心大ひに決する所ろのものなき乎。むかし、ナポレオン一世は、人を殺し、國を奪ひて、理想大帝國を打建てたり。而して、此國の始皇帝は、一世をすら生存らふると能はざりき。左れど、同時代の同國人スチブン、グレレットは、二枚の裏衣を有せず、二箇の履を用意せず、單身獨行、千里万歩して、各國の帝王に遊說し、其心を更へて新にし、以て國政を一新するの元動力を培かひたり。蓋し、道德上の改革は、兵卒を要するとあし、金錢を要するとなし、助力を要するとなし。若し、玆に一人決意し、脩養し、達德し、以て大ひに立つとあらば、其一人にして、一國政機の軸を一轉するを至難となさず。政黨人は、役者の如く、角力士の如く、わざ〳〵議會の講壇上より聞えよがしに絕叫して內閣の罪を鳴らす。然れども其聲高きが故に遂に之を聞くものなし。玆に人あり、其德能く化し、其言能く服すの力を有し、仙乎として內閣に入り、中夜當路の人に敎へて、飜然其心を更へしむるとありとせば如何ん。此を以て彼に較べ、其爲し難しと云ふは、則はち人の敢て爲さゞ

るに由る。苟くも爲すとせば、此事の直接にして、而して其影響の至大なる、何んぞ彼の空漠々として徒らに論議するの比ならんや。左れば、道話を以て漫に實用なきの事を爲すと言ふ勿れ、實用なきと有るとは、修德道話の人如何による。苟くも之に當れりとせば、其の邦家目前に緊切なることの如此きもの、決して他にあるなき也。

第四議會

元勳內閣と云へる美辭を戴けども、維新當初の期望を達成せんともせず、窮々として城壁に據り、穴より顏を出して樣子如何にと打眺めてのみあり、其脆きこと殘卒の破城を孤守するに異ならず。然るに、民黨なるものの勢力も亦微なる哉、何故、一擧して之を拔くこと能はざる乎。嗚呼、欠所、病所、彼此ともにあり、短長相較べて、誰か烏の雌雄を識らん。左れど、短長の比較は無用なり。今に於て爲す可きは、民黨が、先議會に於ける決議に據り、更に一步を進めて、撰擧干涉の非を鳴責するにあり。現內閣、すでに多少の地方官を免黜したり、然れども其巨頭にして倘除かれざるものあり。此等は、更に一致して、其の處置の決行せられんことを追促せざる可らず。

自由黨が、積極的議案を提出せんとする、頗ぶる可なり。每年たゞ乘取策を講じて、國家の大益事を一箇も議定せざる時は、民望はいよ〱國會より離る可し。航路擴張、輸出稅全廢の事の如き、此回、必らず成就せしめざる可らず。

議會は當に巨人たるべし、其戰は巨人の眞戰たる可し、雜兵が小ぜり合たる可らざる也。故に、寬容す可きは寬容し、度量を濶大にして、些細の事に討論す可らず。但だ夫れ事議權の消長に關し、議會の品位面目に關すること出來せば、猛然大怒して、必らず內閣を責破し降服せしめざる可らず。之が爲めに、解散となることあらば、寧ろ祝すべし。そは正を踏んで解散せらるゝが爲の故のみには非ず、今の議會は寧解散せられ、議員撰擧に一と洗濯せらるゝことを幸とすれば也。今の內閣は對手にするに足り、今の議員中には賴母からぬもの多し。本年の議會の如きは、決して苟安調和の策を執可らざる也。」

或人曰く、本年の議會は、意外に靜かならんと。吾黨も亦た之れを掛念す。故に其の斷じて果行し、必らずや、碌々瓦全

せざらんことを、豫じめ熱望するもの也。

河野文部大臣

文部省改革正に中するに當り、敢て一策を河野敏鎌君に呈す。

文部省は、之を廢して、一廳となし、內務省中に合するも可なり。加之、君が俊敏才巧なる、百年樹人の持重政務に於て、安んぞ可きにあらず。君が長所は、今の文部省を改革し了するにあり、他日久しく之に安據せんとせば、君は或は宋人とならん、后日更に改革を要す可きもの、亦或ひは之より生ぜん。故に、君の爲に謀る。君は實に文部省全廢の大策を實施するに恰當なる人なり。此省、他より廢するとは難し、君現に其大臣となりて、而して之が全廢策を內閣に提さげ出さば、其行はるゝは、太はだ容易にして、其事の痛快なる維新以來絕無と稱せらる可し。此に於てか現內閣の聲望非常にして、君が榮譽も亦た驚ろく可きものあらんとす。君到底久しく文部省中の大臣たる可らず、何んぞ此の千歲の好機に於て、速かに猛然一斷せざる。

土佐傳道

土佐國の天職は、急激的宣言を爲すにある歟。むかし、薩長土の調和を主謀せしも此地の人なるが、王政維新、大權奉還の改革說を計畫せしも、亦此地の人なり。近世、坂垣、谷、後藤の三氏を以て、各派の主義もしくは無主義を代表するが如く、自由論も、國家說も、糢糊曖昧策も、凡そ其極端なるものは、皆此地より產出せり。土佐は夫れ天下に率先して、何事をか辨論宣言するの使命を負へるものと見えたり。而して、今は基督敎、破竹、決河の大勢を以て傳はり、向ふ所ろ國中に敵なきが如く、一派の青年は則はち挺身躍立、將に斯敎の大傳道を以て天下に奮わんとするものゝ如し。加之去月初旬、大坂に於ける日本基督敎會の大會は議決せり、向后一年間は、大擧して、土佐全國中に一齊の傳道を爲さん、初めは五名の主なる宣言者を派遣して、到る處の野に叫ばしめ、續ひて十名の傳道者を各要地に派遣して根礎を固む可し、之が爲めに五名の常置委員を設け、片岡健吉君、其一人となりて、大ひに之に當らん云々と。此決議は齊然たる滿塲の一致を以て確定志たり。準備今や略ぼ了し、近日將に開戰の報あらんとすと聞く。近ごろ斯る慶事を耳にすると稀なり。

批評

○大久保甲東

史海十七巻に載たる矢部新作氏が大久保甲東評傳は、所々に老熟せざる論話を挿はさみ、有すもがなと思ふ感じなきにしもあらねど、大躰、甲東を斯く精しく論明せしもの曾てあらざるが故に、多少、讀むに面白し。殊に所々大熊伯より聞きたりてふ評言を點綴し、一種の味を添ゆ。大熊伯の識見は多く得がたし、就中其人物評は、剛にして穿ち、よく究所に當るとなるが、甲東を評して「大久保は實に頼み甲斐ある政友なりし、一度相約せしとは假令ひ如何なる困難と妨害とに逢着するも決して變ずる事なかりし」と云ふもの、恐らく第一知己の言ならん。

而して、作者が、木戸と西郷とを傍論するもの、多くは當らず。ことに西郷が月照と入水せしを評し、西郷の此擧の如きは是れ豈に痴人の所爲に非ざるなからんか、彼れ井伊掃部頭の一喝に驚いて望玆に盡きたりと爲し、倉皇相抱ひて海中に入る」と云ふに至りては、殆んど大俠の心術を知らざるもの也

○日本外史と讀史餘論

田口卯吉君の著なり、外史氏の史論多く讀史余論より利用し而して其旨を明言せざるを醜とし、君美の爲に辯護したるものなり。其對證の精密允當なる、頗ぶる愛讀すべし。

○河村瑞賢

少年文學の第十五篇として、太華山人の「河村瑞賢」出づ。少年文學從來の諸篇中、未曾てあらざりける多くの參考書と、練磨鍛成せる文字とによりて著述せらる。第七章以下奧羽海運、安治川開鑿、等の記事は、少年の讀物として少こしく乾燥に失する嫌ひもあれど、亦遂に之を欠く可きにあらず。其才の天成なるとを說示すが如き語調多けれど、亦、究學工夫の能く人を發達せしむるとを敎ゆるの用意もあり。約するに、此篇の如きは、既刊「少年文學」中の最高等に位ひするの價値あるものならん。

○地震家屋、及、日本建築構造改良法、附錄

「地震家屋」は、佐藤勇造氏著わし、日本建築構造改良法並びに、其附錄は、伊藤爲吉氏著わす。「河村瑞賢」を讀みて后ち、此等の書を繙とく時は、文明學術の進歩は、如何に多く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人に妙智を得せしむるかを驚歎せざるを得ず。此二書は、同好の人により、殆んど同様の目的を以て著述せられたるものなり。但だ、伊藤氏の方、構造法に關する發明説を掲げ、且つ其秘傳を惜む所ろなく告白し、而も尤とも信切に、其建築上の心得を教示したれば、たとひ專門當路の人にあらずとするも、凡そ家屋建築に關わりある人は、一讀して其益を享くるを得べし。

「建築構造改良法」は、地震、水害、火災の三厄に對し、家屋を安全保存するとを得可き建築法を説きたるものにて、其法極めて密なりと雖ども、要は一に歸し、主として、目下の建築法の弊失を補ふにあり。

從來家屋の欠點として擧る條々に云く、

日本家屋は屋根の重量を以て壓抑し其位置に在しむるの構造なれば之に反對の方向より來る外力の强大なる者に會へば顚倒を免かれ難し。

日本家屋の構造は集合力を利用せすして各材孤立の有積を爲す故に相支持するの力に乏しくして破壞し易し。

日本家屋の構造は只だ仕口手際の宜しきを尊さんで他方より受くる力に就きては少しく慮らす故に薄弱なるを免かれ難し。

日本家屋の柱材は之に他材を取付くる爲に甚はだ複雜なる枘孔を穿ち切り欠きを爲す故に其彈力を損耗し曲折し易し。

枘を以て移動を防ぎ又重量を支ふるには家屋全躰の强力を弱むる者にして摧折し易きを以て不完全なる構造さす。

日本家屋の骨材さも云ふ可きものは貫及び貫を柱に固着せしむる楔さす故に若し貫の腐朽するか或は楔の緩む等の事あるさきは僅かに人の起居歩行するに於ても全家に微動を感ずる也斯る場合に至りては只だ家根の重量が全家屋の中心を保ち柱をして均一に支へしめ居るに過ぎざれば一個所に僅かなる外力の衝動を受るも轉倒破壞するとあるなり。

瓦葺屋根は其家屋の中心點の高きに失するが故に日本の如き地震國には不適當のものさす其例を擧れば彼の時計の振錘の僅かなる力の爲に其動搖を保つは唯だ其垂下したる重量に受けたる原力を失なわざるに因るものさす之れ日本家屋の一度振動を受るに於ては容易に止まるとなきの理由を明々に了知し得る也。

而して新構造法は、一々此等の欠點を補ふものゝ如く見ゆ。

○罪と罰

文學上細密なる批評は、透谷子がものすと聞けば、われは略す可し。たゞ、通讀の際、偶然感じたるとのみを記さん。

此譯は、尋常輕薄の士が筆に成りたるものならず、不知庵があみ〳〵ならぬ、苦心の末に出で來しものなり。ことに、不知庵が一種の信仰をもて淺からぬ同情を寄せ、罪と罰との關係につきて世を慨し又た世を痛みたるの寓意少なからぬをもて、譯文自から論著に似たる氣力を現ぜり。

人の罪は、社會の制度より來るもの、又、遺傳の生理より來るもの頗ぶる多し。而して、此罪を責むる世の人の慘酷は、倒れし人を見て血を嘗んとする狼の如し。元と、人を責むるの權利及び價値なきもの、尤とも酷に人を責む。法庭の判官と雖ども、亦然るとなきに非ず。

此書は、魯士亞小説なり。冷酷無道なる社會を憤ふり、此社

九

會の繼子となりたる罪人を憐れむ情、全篇の骨髓たり。其主人公は、元來鬱僻せり、而して此鬱僻は、社會の不公平より結果したり。彼は、病人なり、故に其心理的解剖は、即はち病理的説明なり。

第一の巻の中、第六回を壓巻とす。病狂夫、まさに不思議なる決心を爲なんとするに當りて、

しかし道德の一方より見ればラスコーリンコフが始終躊躇するも道理ある事で右から左から內に外に色々に考へて千々の反對の生ずるまゝに任せたがとう〱譯の解からぬ抵抗す可らざる魔力に動かされて詮方なくも盲摸しに道を辿つて恰かも車輪の歯に衣物の端を嚙まれて餘儀なくも見す〱命の果てるを承知しながら器械に卷込まれると同樣であつた。

罪に趣くの情狀を寫し得、人をして戰栗せしむ。犯罪后警戒の情に付て云く、

何故に斯く警戒の念が薄らぐかと云ふにもと此輕忽無謀な所爲は惡意が萌した途端に高度に上り次第に募つて犯罪の當時まで引續き其后暫らく經つてから人に依つて多少の度はあるもの丶他の病氣の如く漸次に快癒する一種の狂病に原由するらしい。が、果して犯罪は病氣の結果か或は犯罪の性質に依つては必らずしも病氣と相隨伴するものにあらぬか。

嗚呼、錢を貪ぼる慾心あるにもあらず、貧者を救はんとの俠氣あるにもあらず、血を見んとを欲する殘忍の慣れあるにもあらず、只だ何事にもあらぬ一種の魔力彼が神經的沈鬱症の頭腦中に兆し、熱發し、而も之と云ふ大勢力あるにもあらずして、偶然、人をして遂に大罪惡を犯さしむ。夫れ、罪となり、大惡となる、瞬忽の間の方向如何にある也。

如此き病狂は、不平の世、不平の人、即はち不自然の毒氣內に含まれたる時に發するものなり。魯士亞小説よく此種の病狂を寫し、此書尤とも能く之を寫し、不知庵の筆恰かも好く之を譯するものとなりぬ。

蓋し、此は罪と罰との關係に對する懷疑派的の心理解説なり。定めし今の我國には歡迎せらるゝなる可し。而して、罪を犯すの狀、及び罪を悔るの思ひは、眞とに常に如此きもの也と信ずる人多かるべし。

○「忍耐の秘訣」に序す　批評に代ゆ

島貫兵太夫君、同勞會の爲に一書を著わし之を公刊發賣して其收入益金を寄附せんとす、其事既に美なり、而して書は殊に忍耐の德を論明すと云ふ、志望彌よ美なりと云ふ可し。夫れ同勞會は、讀書人が刻骨勞勉して學資を得の同盟團たり。或は牛乳を賣り、或は新聞紙を配達し、或ひは使ひし、或ひは手工し、概して額に汗し、手に豆して、以て其の頭腦心胸を養はんと欲する有爲青年の一軍也。抑そも、今の書生、大率ね空談放論して而も實行せず、切りに慷慨激論するの口にパン一片をすら入るゝの術を知らず、只だ寄生托命して獨立獨活の愉快を知らず、人に錢を惠與せられて、尙ほ勤儉の德を守ることを知らず、眞に經濟の秘義を知るもの殆んど稀也。此時に當りて此同勞會の如きものあり、其精神既に世を呑むと云ふ可し。嗚呼、學問は實行也、精神は鍛練也、而して忍耐を以て之を一貫す。今や、島貫君、其實驗親試する所によりて此忍耐の德を記述し、以て彼同勞會に寄せんと爲す。余は遙かに之を祝して、東北の野長久に望ありと感謝せざるを得ず、野の草は榮へ又枯るゝと雖ども、東北有爲の氣骨精神は百世に存せんか、深く望み遠く望むと云ふ。

正太夫と流行子　　「文界要報」筆者

正太夫は正太夫、流行子は流行子なることと「國會」二日間の紙面によりて明白になりぬ。即ち正太夫とは文壇の大皮肉家流行子とは政界の大諷刺家、正太夫とは國會新聞客員綠雨齋藤賢氏の事、流行子とは國會新聞社員柳江村松恒一郎氏の事、その柳江の流行となるは五六行の大諷刺を書きて政界を吹飛ばす時の號なるよし。世間もし脫蟬子にも勝さる歟眼みうつけものありて右の雷名を聞知らぬものなりてはと杞憂のあまり右二大家に謝すと同時に此段御披露に及ぶものなり。

大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評

（其三）　雲峯子

第四、丈夫風と手弱女風と、眞淵翁が大和の國は丈夫風山城の國は手弱女風なりと云ひしは彼の質朴にして飾りなく、是の文華にして優美なるによれると雖ども、其主義は彼を貴び之を賤しめ、古風を與さんとしせしと明かなり。只其誠實を

のみ、學ばんとならば可なりと雖も、徒らに古代の言語をも學ぶべしと云へるは即ち誤りのみ。景樹の駁論の主意も亦之を辨ずるにありし事明白なり。其の御世々の風あれば強て、之を賤しむ可からずと云ひしにあらずや。誠に然り若し夫れ世變はり、年移れる後、古代の風俗言語を摸せんとするは、恰かも支那人の或者が、十九世紀の今日に於て堯舜湯武の治世に復さんと望むの類のみ、豈成るべきの事ならんや。眞淵が幾百年來の弊風を矯め、藤家累代の惡習を破らんとし、亦實に之を破りし精心と功績とは赫々として沒すべからずと雖も、亦同時に過失なき能はず。彼は正しく歌道の復古主義を唱へき、彼自ら之を實行せんと欲したりき、而して遂によく何處まで成功せしか。

彼が一代の大家を以て自ら居り、亦歌道の改革を自ら任じたるが如き誠に殊勝の事と云ふべし。然れども全く古風に復する能はざりしは、彼が所謂の社會進歩の大勢に背くが故に非るなきを得んや。彼は自ら全く古風を學び得たりとなし、亦復古主義を實行し得ると思へりしならん。然れども古風を學ぶの事容易にあらず、否能ふべきにあらず。只古代の言語を用ひ、昔時の格調に似たる(眞にあらず)を以て格調と思へりしのみ、試に彼が作りし長歌中最も古風なりと許せらるゝ、

かみつけや、にひたの山は。いでたちの、
　よろしきま山。いりたちの、くはしき嶺かも云々。

と云へる一篇を見よ。誠に古風にして萬葉の長歌を見るが如し。然るに尚純然たる古風にあらず。橘守部すでに、之を知り、其長歌撰格に於て之を改め、以て古風になさんとせりき。然れども焉んぞ知らん、守部の改訂せしもの、また未だ古風に似て非なるものにあらざるかを。只夫れ古代の歌風格調は之を讀むべくして、之を學ぶ可からざるか。聞き慣れざる言語はわれらに明白の感覺を與へず、故に鄙言俚語も風雅なるが如く聞ゆ、萬葉の歌必らずしも當時の雅言にあらず、景樹の云ひし如く皆普通に用ひし言語に外ならず。往古は我國に於ても雅俗言文の差違今日の如く、甚しきものなく、日常の言語は即ち和歌にも文章にも用ひしならん。然るに今日に至り、此時代の言語に非ずんば卑俗なりと打つけに思ふは不可なり。況んや之を丈夫風となづけ、之に依らずんば、和歌を作る可からず、調とゝのはずとなして猥りに古代を慕ふ

に於てをや。ヨシ景樹の駁論に於て、或所は無理なりとするも、其本躰に於ては不可なし。此點に於ける兩者の相違もまた其根本の歌論同じからざるに基するを知らざる可からず。豈水と油とよく混和すべけんや。

第五、調と理と大西氏の云れし如く、或所に於ては、景樹は全く理を斥けて單に調とのみ云ひしが如し、歌は調ぶるものなり、理はるものにあらずと、常に人に敎へ、之を以て家言となせり。然れども是只一時の弊風を治するの藥名なりしのみ。調を說ば遂に理を併せ得に至るの秘訣を彼は知りき。

> か様に申せばさて〳〵調所ではない、道理がまがふことじやと思はれ候はんが、そうではなし、のびやかになり候得ば獨此様の無理がなくなる事に候也、調と道理とは叉離れたるものにあらず云々（隨處師說）

世人多くは道理を述べて歌を詠まんとす。其弊實に甚し、此故に彼は時弊の反對の位置に立ち、己が心に實際思ふ所より更に極端なる說をたて丶、大喝叱聲以て幾百年來の迷夢を攪破せんとせり。是何時の世、如何なる時代に於ても、凡そ改革を企づるものが、心にもなき極端に走ると等しきことなり。斯極端に走る程の熱心と勇氣となくして、豈一道の改革を爲し得可んや、今や歌の道の行はる丶所、香川翁の名傳はらざるなきの勢に至れるもの豈偶然ならんや。

此點に於ては殊に大西氏と異論なければ長くは云はじ。いで最大要點に移り、いさ丶か異論を記さばや。

第六、景樹が歌論の根據。大西氏の曰く

> さすれば、善く調べん抔と思ふが、早や迷誤の門戸なれば只端的に、云はゞ、出まかせに、眞心に感じたるまゝを云ひ出すの外なし、調をよくせんと思ふの一念を挾まば、既に一歩を誠實より、遠ざかる事となるを以て、凡てそこらの念慮を超脫して、全く意を用ひずは工夫を假らず、只自然の儘なるを要す、景樹が歌論の究竟する所は、遂に此に至らざるを得ざる可し、此極端なる、云はゞ、自然說に至らざるを得ざる可し。

大西氏は斯く論究し、次に景樹の論は「實景實物に向ひて吾が調にて、今の言葉にて誠を陳べ試み給ふべし」と云へるを引き此に結着せざる可からずと斷言し、彼が押し立てし旗幟は即ち此一句にありしなりと云ひ、最終の論結に曰く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

然らば詰る所は即吟を以て、歌道の奥義、歌の眞に歌たる所を得たるものと見做すに至らざる可からず云々。

其歌論の論理上の結局は是非とも此に至らざるを得ず、是其論の極端なる自然説と云はるべき所以なり云々。

氏が論理上の結論題に此に歸着す、詩道が一の技(アート)なる事を景樹が忘れたりと云ふに至るも、亦無理ならず。乞ふ暫く論結に立至る前の點につきて少しく云はしめよ。

已に云へる如く景樹の議論が、極端に流れしは、彼が世を警醒するため、自然に斯くなりし也、此故に一局部の言論、或は一部分の教説を採り來て直ちに判斷を下す可らず。是只彼が歌論に於てのみ然るにあらず。凡そ聖賢偉人の教説概ね然るなり。例せば耶蘇教に於て、今日は今日の事を思ひ煩らへとあるを直解して、日々の勉強職業の如きは後日を思ふものなりとなし、全く世上の事を中止すべきか。亦一眼汝を罪に落さばくり出して棄てよとあるを、必ずしも、字義の如く實行すべきか。汝等赤子の如くなれとあるが故に我等、全く赤子の如くならざる可らざるか。亦實際斯くなり得べき事か是等は皆極言して教へたるもの即ち時弊を矯め、人間は薄弱なるが故に、極端の言語を用ひたるに非るか。豈一々文字の意義の如く實行し得可けんや。景樹の歌論に於ける亦斯の如きものある也。此故に一方に於ては、虚僞に流れ、空理に陷らんとするを見ては、實物實景を見て、今の言葉にてよむべしと云ひしが、或時は斯くも教へたりき

先づ大段長歌は奈良より以往よろしく、短歌は奈良より以後宜しきなり。よりて短歌は古今を學びて足りぬべし。さらば長歌は万葉を學びて足りぬ可きかと云はんに、万葉は時代遠きが故に、自然調と詞の中に用捨なくば叶ふ可からぬ云はれありて、短歌を古今に學ぶが如くは、打まかせ難き所あり。されば古今万葉の調をよく心得て、調和せずば有可からぬ也云々。(隨處師説)

歌書を見て益すべき人には歌書を見よと云へる事明か也。亦「歌は雅なかれと古人も云へり」と教へ、「歌は搆へて詠まんとすべからず」など云ひしも、亦是一種の惡癖を矯正せんとせしが爲のみ、されば

今は姿と云ふ所に心をとめ給ふべし。本より夫〳〵の姿なきには侍らねど、眞の姿侍るべし。姿を得ざれば、歌なり

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

とは申難く、さらば最第一の工夫に候得は、是より夫れに(姿を得るの工夫)御掛りあり度候云々。(隨師處說)

また曰く

道は私の道にあらず、天下の道也、……それをなぐりよみにし、或は名利の爲めに人にてらふ抔あるまじき事は云ふも更なり………とたびの御詠草は其心を用ひて物し侍れば、竊かに御工夫第一に候云々。(同上)

手もなく天地鬼神を感ぜしむる事も、此善盡し、美盡す所にて候也、されば上品にけだかく奇麗に調べなさんとするは此道の修行にて外に何事も無之候……御社友にも此所御示し被下候て御入精相祈候。(同上)

さる限り迄は敎ゆる道なく、受くる人の上ならん事、申迄もなし、何れ打吟じて感さへあれば歌也、其感をたどるが稽古に候。(同上)

斯くの如く敎へし事、幾度なるを知らず、工夫と云ひ、修行と云ひ、稽古と云ひしは抑も如何なる事ぞ。歌も亦一種の技(アート)にて、稽古して達すべきの意なる事明けし。(次號完結)

さる穿き神學博士自慢の息子持ちてけり。此博士他へ行んとして立出る每に息子に向ひ、かくいふを慣わせさせり。我見はけふも愼みて、誰の子なるかゆめ忘る可らずと。一日此息子父の立出るを見送りて、いち早く「おとうさま、いつて入つしやい、誰のおとつさんだといふを忘れてはいけませんよ」と。

論説

武道の發源　天知子

(下段)　軍學と武道の潮流

花の『美』を賞して花の『聖』を見ざる者、未だ花神の何物たるを知らんや、物質的表面の活動を觀て未だ裏面に横流する形而上の大勢を味はざる者、共に幽玄道を談るに足らず。吾人歴史を繙くに當り、深味濃凄、云ふ可らざる崇高の趣味に案を打つもの、實に暗黑時代に在りて存す、恰も渺茫として際限あき廣大なる北極氷田に立ちて、愕くべき氷山の滑り往きたる蹟を眺め、其夥しき大石巨岩の印跡を物凄くも觀るの感あり。暗黑時代はサタンの樂園なり、百鬼喉を鳴らしてヒユーマニテイーの生血を涸し、君なく臣なく親なし子なし、人皆ホームを味ふに暇なく而して女性の世界には非ず、

唯男あるのみ腕あるのみ、權も腕より成り業も腕より成り、富も腕より成り而して人倫の秩序も腕より成る、此に於て膂力虎の如く勇猛狼の如き冒險的の豪傑は此樂園に百花の如く咲き亂るゝなり、而して此輩最も華麗やかなれども實は第二流に立ちて第一流人物の器械と成りしなり。

サタンの樂園は實は天使の樂園を作らんと爲せしなり、ヒユーマニテイーは到底大に叫ばざるを得ず、終に一大鍛錬を經て非常なる形而上の新世界を開き、大に一道を開發するの道士を起し、此道士の門弟をして終に第一流の人物を暗黑時代に作り出すに至れり。

支那の暗黑時代なる周末覇業の戰國は、恰も希臘、羅馬時代に種々の哲學者を發起したるが如く、多くの道士は實に夥しく誘導せられたり、此際に於て討究せられたる道の一として六韜三略は隱れたる道家の手より戰士の手に渡りたるなり孫子呉子の戰道も、太宗司馬法及び尉繚子の兵書の如きも、皆此間に胚胎せざるはなし、當時の戰爭は覇業を成功せんが爲めなり、覇業は王たるの業なり、王事は人を心服從事せしむるにあり、人の服從は鍛錬せる人物にあり、而して人物は一道を究めすんば鍛錬するを得ず、此に於て兵書は終に道家の手より成りて戰國の敎課書とは成りたるなり。

太公望あらんか、鬼谷子あらんか、黃石公あらんか、無しとするも余は天才のインスピレーシヨンの人代名詞たることを信ず、有りとするも亦差支へあることなし、這般の道家は戰國の敎育家にして、軍師なる者は戰國の敎授者なり、而して兵書は戰國の敎課書たることを知らん。

東洋のマストドン（前世界の大象）が一呼吸より發源せしめたる戰書の一道は、醍醐帝の時終に大洋を渡りて日本へ飛來せり、大江維時が入唐せし時端なく六韜三略を認めて已に非凡の書なるを知り、之れを密藏して訓閲集を著し、以て始めて其精神を日本社會に紹介せり。後白河帝の時此書吉備大臣の書として鞍馬寺に藏せしもの、鬼一法眼なる法師の活眼に研究せられて終に源九郎義經の腦髓に咀嚼せられぬ源義家は早く大江家に之れを學びし等の事あれども、必竟其本生命を現はしたるものは足利末年應仁以降に之れありとす、暗黑時代の精氣は又暗黑時代に因らずんば其騏足を延ることを得ず支那の暗黑時代は實に日本の暗黑時代に反響せり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

此暗黒時代の中央に於て、甲州流の軍學と稱して群勇を風靡せしめたる山本勘助道鬼より、小幡勘兵衛景憲に至り實に軍學兵道を中興せり、爾來岡本流、山鹿流等の名家蹶出して頗る道を講究する所ありしが、終に漸く道廢れて技術にのみ流走し、德川氏の晩年に至りては精巧なる西洋流軍戰の器械的技術に一籌を輸し、軍學は全く技術に流れて技術の雜兵に打ち亡ぼされ畢んぬ。

然らば此軍學の同胞たりし武道は如何に進み往きしか、吾人之れを觀察せざるを得ず。

武藝は固より射術、馬術、槍術、刀術、砲術、柔術、捕物術等より諸禮等に至る迄、範圍極めて廣くして漠然たらざるを得ず、然れども余は其武道を完全に發起したる武藝に付てのみ其道を觀察せんとを欲するなり。

元龜天正年間の精髓は凝りて、刀鎗術の中興開祖なる天眞正傳と稱せる神道流の飯篠家直を降せり彼れは一身を以て之れに投じ滿腔の熱血を犧牲として天に祈る、塚原卜傳一世を靡けて無手勝流を起し、諸岡一羽微塵流を起し、有馬流、天道流、富田流等續々起りて伊藤一刀齋亦一刀流を發起し、上泉伊勢守亦神陰流を開き、室町家に吉岡拳法名聲を擧げ、日下無雙兵法術者の榮號を擔ふて足利晩年の天下を橫行したる宮本武藏政名は播州に起り、諏訪流は小田原北條の時代に起り京流は山本晴行に起り、鞍馬流は大野將監に因て起る。之れより先き鎗術も亦無邊流あり佐分利流あり、本間流起り樫原流起り、建孝流、木下流等種々流名を立てゝ競爭するに至る。

而して德川氏の治世に入るや、亂國の餘勢は益々習慣性を逞しふする所と成り、封建諸藩の割據對峙の競爭は一意專心此武藝の上に傾向して、寧ろ亂世より盛んなるを致せり。

總て鍛練は困苦繁忙の時に積みて、進步は閑樂靜念の時を待て發顯するものなり、學窻繁机の時未だ進步を知るを得ず、校を出でゝ始て之れを知るが如く、修道のよ亦一として然らざるものあらず、武道も亦戰國に産れて治世に進步したり。

德川の治世は戰亂敗德の後を受けたりと雖ども、家康が明德なる儉譲主義の施政は能く武士道を活用して文武の二道に向ふて奬勵し、太平安逸の閑日月を遊蕩惰弱の學校と成さゞりしよう勉めたり、此に於て其閑日月は大に武道を進步せしむるの學校とは成りたるなり、彼の柳生但馬守宗嚴の新設した

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

る柳生流は、澤庵禪師と奇遇して終に全く禪は武藝を一大開發せり、柳生但馬と澤庵との奇遇は決して一個人の會合に非ずして、實に武と禪との會合點を作りたるものなりき、宗嚴は織田氏に仕へて後家康に謁し、漸く世上の注意を曳くを得たり、而して十兵衛三嚴に至りて愈々武道の最盛期を極め、其間復た禪僧の武術家と成る者多く、以て益々武と禪との親密消化を來し、武道は全く精神的と器械的とに完成したりと言ふべし。念流の開祖上坂半左衛門は臨濟派の禪僧なり、奥山念流の開祖なる光明院行海は修驗者なり、寶藏院一流の鎗術家は覺禪坊以來常に南都の僧徒なり、東軍流の祖衣斐丹石入道は天台山の東軍坊を師とし、自源流の祖瀨戸口備前守は薩州伊王瀧の自源坊に因て妙機を悟りしの類、頭々として數ふ可らず。斯くして始めは禪に因て結び付きたるの武は、漸く範圍を擴めて內包的進步と共に外延的進步を爲し、以て他の宗教に迄結び付くに至りしなり。

爾來其歷史は常に治亂興敗の時世に伴ひ、起伏波動して或は藝に流れ或は道を唱されつゝ、陰然武道の氣風を以て國民を養成し、封建制度と運命を俱にして常に日本の忠實なる良臣たりし。拔藝は又他の路を求めて橫進し、居合ひと稱して拔刀の術諸流を起して精妙に至り、小具足捕者の術亦大に起りて江戸府中に又柔術なるもの新興し、制剛流あり關口流あり柳生流あり戸塚流あり天心流あり、各々術を磨きて一命を之れに賭し、或は櫛風沐雨して終生を旅上に托し、或は人情の愛を犧牲として此道に沒了し去り、或は獻身して此道の極致を探らんとす。當時榮達立身の途は一に武の修業にあり、故に當時青年の思想は一に修武に傾き居りしとは、恰も今日の學術修業に於ける如かりし、故に武道の免許てふ卒業證書は猶ほ今日の大學卒業證に於けるが如く、能く十年餘の苦行を忍びて往々英士を產出せしめき、然れども夥しき武術家も多くは武道を知らざるの盲目者なりし、自己一身は多年の鍛練に因て自ら識らずして、道を得たる者ありしと雖ども、之れを弟子に說明して多く發表するとを得ず、或は碌々として肩を聳かし腕を撫して一世の腕力家を以て誇り、律義なる小兒の自任せるが如く、終に道を認むるとなくして落花の如く又虛花の如く消へ去る者多かりし、是れ併しながら文と武が全く分立して一致し能ざりしの弊に出でずんばあらず、而し

て又武と宗教とは相納れざる如き傾きありたるの弊に出ずんば非ず、文は弱なりと思ひ宗教は弱なりと誤信したる強がりの猪武士が、狭隘の愚見を以て自己の大道を暗殺したるの痴を悲しむ。

封建制度衰へて武道亦衰へ、封建制度倒れて武道亦倒れんとす、而して明治以來武道は又誤解せられて、所謂壯士一流の持物たらんとし、其弊は終に武道を知らざるの傍觀者に誤解せられんとす、吾人茲に道を唱すると久し、而して世は未だ冷々たり、誰か之れを万世に傳ふる者ぞ、之れを大に喚起するものは夫れ基督教か、禪教か、吾人未だ知らざるなり。

以上說き去り說き來たる武道發源の履歷に於て、其含有する所の要素を分解せば、哲理、倫理の成分より堅志練膽等の修心、察機、敏捷、防衛護身等の修術、及び躰育と禮節との諸要素を含みたるもの始めて其完全なるものと言ふを得ん。

武道の發源を略述する所夫れ斯くの如し、蓋し極めて其大勢を觀察したるに過ぎざりき。

米國は國の新たなるが爲人は總て成り上りもの多く、氣風も自然さびあがり、輕忽、似非もの知り多しとは歐人の一般評判する處之ある時一人の若き米人大意氣込にて何かしやれを言たるに對手の英人の平氣に一向笑はざるに拍子拔けして、

君、わからない子、あさつて當り漸く分つて笑ふだらうの

對手の英人

イヤさ、しやれなら四年まへ印度に居た時分モウ笑つちまつた奴さ。

摘要

○修身書採定の標準

三田翁曰く、道德の書を見て其孰れか最とも善良なるや否やを識別せんとするが如きは實に至大の問題にして文部二三の官吏が果して之を決定するの見識あるや又其權利あるや頗ぶる疑ふべきのみか之を決定せんと欲するこそ却つて錯誤を來たすの本なれ。然らば修身用書は世間人々の出版に任せ一切不問に看過す可きかと云ふに是亦然らず其禁止は唯有害のものに限り他は都て之を許可すべし。左れば文部省も教科書を撰ぶには最良採定の舊筆法を止め單に害あるや否やを檢定する迄の趣向にす可し。且夫れ文部省が最良を撰定せんとするが爲に隨て用書の數を減少するより出版者は何れも自家の書の採用せられんことを競ひ競爭の餘云ふ可らざるの醜聞を滅すことさへ珍らしからずと。是れ至當の論なれども文部省は常に唯我獨尊的の筆法を止むることなし、其止むるは困りに困り拔し上の事なる可し。

○支店分家出張所

松方伯曰く、支店出張所は置かざるをよしとす、之を置くは頗ぶる便利なる樣なれ共、兎角過失を生ずるの本源となるなり、歐米にても少し確實にして盛大なる銀行は多くは支店出張所を設けず、夫に付余は手近き實例を示さんに、鴻池は昔しより支店出張所を置ざるを制とし居れり是れ熊澤蕃山の定むる所なりと云ふ、蕃山の明は彼歐米人と暗合し經濟の理法に明らかなるはホト〳〵感心の至り、且つ蕃山が鴻池の家計を定むるに當り分家の者に產を分つに實產を與へずして壁丈を與へ其實產は本家にて監督し利子のみ與ふることにせしより同家の分家に限り確實にして離散亡滅するものなしと云ふ是等も大ひに味ふ可き價値ある也、と。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

○北海道改革

大隈伯曰く、余を以て之を見れば殖産興業の事たる人に在りて資本に存せざるなり、北海道を談ずるものは資本の注文何如を説く、是れ凡庸政治家の俗論のみ、徒に資本を説ひて人を問はずんば北海道の拓殖は將來猶ほ今日の如けん、彼の白耳義を見ずや、彼の北米を見ずや、彼の日耳曼を見ずや、資本足りて後ち今日の富强を得たる歟、抑も其の起るや薄資乏財自から支へざらんとする中より大に敵愾の心を喚起して以て今日あるを致せるにあらずや、殖興の事業亦如此きのみ。惟ふに伊藤と云ひ井上と云ひ北海道の不振なる所以必らず看破せざることなかるべし、然れども此間一點の私心を挾はさむあれば一切万事止ぬ、政治家の過失は私心より破る、現政府にして私を斷じて、公に就き以て大ひに北海道の面目を一新せんとするに意あれば、一年を出ずして其成蹟必らず見るべきものあらんと。凡そ、民間にある政治家の議論は常に公平なるもの也。

○万國赤十字第五集會報告略

此報告を赤十字社より配布す。其末文に云く、

開會中万國平和會より第五万國赤十字會に宛てたる來書の畧に

万國赤十字社は戰時負傷者の災厄を救濟するを以て目的とす然るに我万國平和會は吾人の社會に戰爭なる災厄を絕つを以て目的とせり幸に之を遂する時は復た戰時救護を講ずるの要なきに至るべし共に生民相愛の至情に出づ故に今后來會の各國委員若くは各社に於て本會の主義を御贊成被下第一に平和を講ずるの急要に御協力あらんとを祈る云々

右に付第五万國赤十字社會議は內會議を開き左の如く回答するに決す

我万國赤十字社會議に於て戰爭は社會に免る可らざる一の事實と認め只是より來る慘害を救護するに在り理論に偏して無義の戰を世に試むるとを欲せず是則しく博愛の感情に出ると云ふと雖ども本會議の名を以て万國平和會を贊成するの議を肯ぜざる所以なり云々

○自由黨の海軍擴張論

其の海軍の大計畫なるものに云く、

概して之を言へば我國の如き陸軍は之を守るに在て海軍は之を攻るにあり奇正を以て之を分てば陸軍は正兵にして海軍は奇兵なり守る者は地方分權を以てせざるを得ず攻むる者は中央集權を宜しとす故に陸軍は地方分權を主とし各師團の外各地方に義勇兵の制を設くべし。

斯て年々五百萬圓の支出を以て、十年に十萬噸の軍艦を製造せんとす、而して此五百萬圓の出途に對する信望左の諸件ありとぞ、

條約を改正し稅權を恢復せば、海關稅の增加五百萬圓餘ある事

今より大ひに蠶絲業の發達を謀り且進んで直輸出を爲さば收利五六百萬圓の增加を得る容易なる事

我國の航路を擴張し稅權を掌握し輸出入品運賃の一半を我に收るとせば五百萬圓餘の多きあるべき事

海軍の官制を改革し鎭守府の制を改る等の事を爲さば經常費に於て一百萬圓餘を減じ其他緊急ならざる繼續事業を中止せば凡そ四百萬圓を減ずるを得べき事

○酒精輸入の增加

去九日以后の改進新聞に、富川鐵之助氏の稿に係る、酒精輸入の增加に就ての說あり、精確明亮、而して慨然一走、讀者をして思はず悚然たらしむ云く。アルコールの輸入年々增加し廿三年は廿二年よりも數量及代價ともに二倍餘の增加、廿四年は同じく數量に就て七倍、價格に於て九倍半の增加ありと。而して斯くアルコールを增用する原因は、

藥品其他製造所等の用に供する事、銘酒其他各種の西洋酒摸造に用ゆる事、燒酎に製し飲料に供する事。淸酒又は濁酒に混和し飲料に供する事

等にありとぞ

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

○福澤諭吉氏の道德論

十一月五日、慶應義塾商業倶樂部に於ける福澤氏の演説筆記中に云く
元來老生の考は自から宗教を信ずるに非ず唯之を經世の爲に利用せんとする迄の目的なるが故に立言の間に往々宗教の本意に戻るともある可し甚はだ不都合なるに似たれ共信心は人々の自由に任せ諸君が眞面目に宗教を信ずるなり又は自から信ぜずして他人の信心を勸むるなり何れにしても此有力なる元素を利用せざるの理はある可らず。
情を以て情に接す即はち渡世の安全法なれば惠與も亦是れ家を守るの一手段なりと知る可し有心の惠は惠にして惠に非ずとて道德家の忌む所なれども有心無心は微妙の問題にして今日の忙しき俗世界に論ず可き限りに非ず大抵此類なり。

○現内閣と後藤某

亞細亞第六十七號は、「現内閣と後藤某」と題し、政府今日の謀、先づ此の曖昧の者を去り、其强有力を示し、彼が其の怨恨を逞しうせんと欲するか、政府に敵する者、一時群起し、熱心狂奔、彼をして亦一時の勢力を得せしむるとあらん、則はち機の熟するを得て彼を誘ふに一好地位を以てせば、彼又喜で來り就かん、是に於てか其附隨者一時呆然として潰散縱横收拾す可らず、政府は則はち之を機として大ひに聲勢を張り、内外の事思ふが儘に處措すべしと。

正誤　前號文界要報の中に正太夫と流行子と物我生とを同人の樣に記載せしは誤にて正太夫と物我生とは同人にて即ち國會新聞客員齋藤賢氏の事なれども、流行子は同社員村松恒一郎氏の事なるよしに付玆に正す。

雜録

雜感　山月子

(一)人と國

人は國より大なる者なり、國は畢竟人の爲めに存するものなり、何者の僞教育家ぞ、敢て世の風潮に雷同して、此重んずべき人を以て、單に國家てふ環内に孤囚たらしめんとするか、嗟呼吾人は其鳴銅の如き、響鈸の如き國家愛國の空言を聽くとを厭ふ、誤解すると勿れ、余は愛國憂世の心に至りては、决して人後に落ちざる者なり、而も此言をなす者は、彼の日下部某一派の僞愛國家、及び此等に附和雷同する識見狹き田舍の井蛙教育者多きを惜むが故なり。

(二)改革者、傳道者

基督教徒たる者は改革者たり、改革者たらざるべからず、然れども吾人が爰に注意を要すべき事あり、そは義膽、俠骨、剛腸の士、自ら改革者を以て任じ、其同種類の人を以て同志者となし、一團結となし、却て他の柔軟弱小の人を見て、往々厭惡叱咤の情を發する弊に流るゝと是なり、請ふ吾人をして主基督を見せしめよ、主は曰く「人の子は亡たる者を救はん爲に來れり」と、主の選び給ひしパウロは曰く「信仰の弱き者を納よ」と、吾人は實に此心を有せざるべからず、夫れ傳道者の心は即ち眞正改革者の心なり、吾人をして先づ此心を修養せしめよ。

(三)日本改革

妄りに大言壯語するを休めよ、豪傑を氣取り、俠者を氣取りて、决死、改革を口にする者、一と先づ靜かに沈着て熟考すべし、一時の感情により、血氣によりて國民を動かさんとするも得べからず、内に省みて靈の火に燃さるゝや否や、誠の血と涙あるや否やを思ふべし、吾黨の改革は、世の所謂改革と同じからず、即ち枝葉の改革に非ずして根底の改革なり、「一人の生命は全世界より重し」といふに非ずや、然らば則ち四千萬同胞の生命如何ばかり重きか、自稱改革家よ、人を以

て、國家を以て、物件と同視するを勿れ、日本改革は、日本國民の生命を道德的に救濟するに在り、即ち非常の大事なり、至誠の人に非ずして誰か之を成さん。

（四）眞正の謙遜

心にもなき外形の謙遜は、一種の僞善なりといふことを躊躇せず、眞正の謙遜は悔改して神に從ふ人の心なり、我の高き、我の義しき皆神に由りて然り、然らば何の誇る所かあらん、彼の卑き、彼の善からざる、是れ神に由らずして然り、然らば何の蔑む所かあらん、我も神に由らずば、彼と同じからん、或は彼より甚しからん、之を思へば自ら戒め謹み、他を憐み愛する心生ず、此心既に神の國に入れり、進一進せば、弟子の足を濯ひ給ひし基督の謙遜を學ぶことを得ん、吾人は屢々其應對に禮節あり、誠に愼み深く謙遜らしくして、却て其心に不德、陰險、傲慢等を藏する人を見て、憐憫の情禁ずる能はざるものあり。

（五）義の人、愛の人

新約に來るの前、舊約の時代を經過せざるべからず、先づ神の義を見て、而る後其愛を見る、義膽俠骨、火焔の天を焦すが如き浩氣を有し、怒濤の岩を碎くが如き猛勢を有する者、靈光に撲たれて一變し、而して眞誠なる愛の人となるべし、此人にして、始めて愛を言ふべし、始めて愛を行ふべし、軟腸の人妄りに愛を言ふ、適ま以て文弱の氣風を養ふべし、是に於て乎近來反動の聲一隅に起れり、曰く「現今の日本は義を說かざるべからず、舊約を說かざるべからず」と、之を言ふ者、多くは平生自ら義なりとする人々にあるが如し、而して其衆を感化する力なきは、眞に惜むべきなり、請ふ余をして少しく所思を陳せしめよ。

眞正の愛は、必ず純粹の義を含む而して現今愛を言ふ者、多く義俠の骨なし、故に其結果好ましからざるものあり、之に反動して義を唱ふる者、多く愛の情けに乏し、故に其結果同じく好ましからず、余は現今の日本に於ては、猶正義、公平の叫びを要するものあるを認む、然れども其之を叫ぶ者は愛の人たらざるべからず、愛の福音を傳ふることや最も大切なるを信ず、然れども其之を傳ふるや義膽俠骨を包む愛の人たらざるべからず、要するに其人に乏しきことを憂ふ。

（六）哀苦と新生

基督曰く「人もし新に生れずば神の國を見こと能はじ」と、神の吾人をして新生せしめんとするや、必ず艱苦悲哀の境遇を與ふ、即ち此苦みは産の苦みなり、産の苦みあり、故に新生の喜びあり、蓋し新生は一度のみならず、幾度もあるなり、幾度か新たなる苦境に置かれて幾度か新たに生るゝなり、而して一段々々に進歩す、嗚呼新生の喜び何ものか之に如かん、今まで見ざりし天地を見、今まで至らざりし天地に進む、吾人進むことを增すに隨ひて、愈々基督の偉大なるを感ぜずんばあらず。

（七）あきらめ

「人間萬事は塞翁が馬なり、因果は廻る車の輪の如し、今生の苦みは前世の果報なり」と、安心に似て非なる「あきらめ」をなす者多し、基督教徒の婦人にして、或は哀苦に際して、斯の如く「あきらむる」人なきに非ず、吾人豈少しく其惑を解かざるべけんや、蓋し「あきらめる」てふ事は、消極的なり退守的なり、是れ基督の希望と正反對なる者なり、犧牲、實に美くしと雖も、失望的の犧牲は其人にとりて些少の益もなかるべし、パウロ曰く「未だ見ざる者を望まば忍びて之を待つべし、聖靈も亦われらの荏弱を助く我儕は祈るべき所を知ざれども聖靈みづから言がたきの慨歎をもて我儕の爲に祈ぬ」と、苦痛は即ち至愛の神が吾人を高きに導かんとて與へ給ふ者とせば、吾人は苦しむだけ苦むべし、祈りて求めて此苦に勝ちて進むべし、而して勝ち得たる時、是れ新生なり、是れ人物一段高く清く美くしくなりたるなり、さるを若し苦に遇ひて、消極的に「あきらむる」が如きは、豈神の惠を無にする者と謂はざるべけんや。

（八）神に對する節操

吾人信者は、平生我靈と我身と、神の前の活る祭物たることを忘るべからず、苦むも、樂むも、泣くも、笑ふも、寐るも、起るも、働くも、休むも、凡て自然に神意

に合ふやうすべきなり、即ち如何なる時に於ても、如何なる塲處に於ても、吾人は基督の意を以て意とすべきなり、或る時は信者であり、或る時は不信者であるが如きは、吾人の耻づべき次第なり、吾人既に全心全躰を神に獻げ、而して事を處するに當り、神の意を以てせず、自己の意を以て輕々に處し去るが如きは、神に對して節操を破る者と謂はざるべからず、吾人の憂ふる所、實に神を愛するの愛足らざるとにあり、若し愛に富まば、必ず節操あらん。

（九）日本の諺と呂蒙の言

人間は進歩する者なるとを知らざるべからず、妄評流行の際、吾人は日本の諺を憶ひ出せり、曰く「三年經ては三ッになる」と、平易の語中、不易の眞理を含む、去日見たりし目を以て今日の人を評するこ勿れ、支那東吳の呂蒙は壯語して曰く「士別れてより三日ならば當に目を刮して相待つべし」と、彼れ猶然り、況んや神に柔順なる人物をや、昨日の人、或は今日の人と異なるやも知るべからず、之を思はゞ自重と同時に恭謙ならざるを得んや、又何を以てか他の人物を妄評するとを之れ爲さん。

（十）尊敬心

吾人の初め神を求むるや、嚴肅敬虔の心を以て聖書を探れり、漸く進むや、天地に對して同じく此心を持てり、而して未だ人に對して此心の足らざる者あるは何ぞや、夫れ神は聖書を通して、天地を通して、人間を通して、顯はれ給へり、謹んで之を考ふ、焉くんぞ人に對して尊敬の心を增さゞらんや、眞正なる學者の眞理を研究するや、如何なる微細の物と雖も、將た不潔の物と雖も、猶鄭重愼密の心を以て之を見る、若し吾人にして此心を以て人物を觀ば、垢に汚れ、破れし衣に包まれたる乞食の中よりも或は貴重の教へを受くるとあらん、尊敬の心は誠に修道者の持たざるべからざる者なり。

（十一）偉人を慕ふ心

シバの女王がソロモンの智慧を慕ひし如く、偉人の德を慕ふ者は幸なる哉、吾人は神の子なり、故に自尊自重、何人に向ても卑屈なるとなし、而して神の子なるが故に、神の愛する偉人を慕ふ、其毅然として屈せざる所は大丈夫の心なり、其無邪氣にして慕ふ所は小兒の心なり、此心二なるが如くにして一なり。

（十二）人物上の理想

甞て心友と語る、彼れ笑て曰く「現今多くの婦人は‥‥何と申して宜しきか‥‥然り、源氏の君といふが如き男女を好む」と多數の眞教育なき婦人に於ては實に然るものあらん、されど所謂教育ありと稱する男子と雖も、其好む所、理想する所の人物に至りては、誠に其卑きを憐まずんばあらず、彼等は多く外形によりて人を相す、身幹肥大にして頓着なく坐する者を以て大膽となし、拳を握りて慷慨壯語する者を稱して勇者となす、而して仁愛、寬容、深沈、大勇の人物に至りては、之を目するに、柔弱、頑骨等の名を以てす、此淺薄輕浮の世若し基督の同情なくば、彼の偉人たる者、何を以てか世に立つとを得ん。

（十三）信仰の偉人 モーセ

アダムとエバが始めてエデンの園に出でしより、バプテスマのヨハネが野に叫ぶに至る迄、百千波瀾の歷史中、巍々乎として天半に聳ゆる人物は、是れ信仰の偉人モーセに非ずや、彼の傳記を除かば、ユダヤの歷史は殆ど無きなり、彼は暫く罪の樂を享んよりは寧ろ神の民と共に苦難を受けんとを善とし、キリストの爲に受る詬辱はエジプトの財貨よりも寶貴と意へり、彼は王の宮を舍て、牧者となれり、彼れは四十年間アラビヤの山野に艱苦を甞め、遂にイスラエルの民を救ふてエジプトを出で、カナンの樂土を望んで、安然エホバの懷ろに眠れり、嗟呼吾人多く目前の事に狂奔する今日の日本に於て、吾人は尊敬と嘆美の心を以て、彼を憶ひ起さゞらんとするも得べけんや。

（十四）純潔の愛

花や月や美麗なりと雖も、未だ以て純潔の愛に比すべくもあらず、純潔の愛は必ず信仰の基礎に立つ、吾人は之に對する每に、讃美の念湧然として止むべからざるものあり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○伊藤伯傷つく

惜むらくは、本年議會に於て、伯が得意の演說を聽くと能ざるを。大ひに之を悲しむものもあるべし、內心ホツト一息する人もあるべし。

○此老翁可憐

福澤諭吉君、其書生に敎示せる人間安心法の演說に云く、生ある者は必らず死せざるを得ず人生朝露の如しとあれば浮世の榮枯盛衰禍福吉凶は唯是れ一時の夢にして論ずるに足るものなしと雖も既に現世に生れたる上は其死に至る迄心身を勞して經營する所なかる可らず是亦人情世界に在る一生涯の義務なり爰に老生が奇語を用れば人間万事小兒の戲と云ふも不可なきが如し戲と知り乍ら其戲を本氣に勉め戲の間に嘻怒哀樂して死するのみ深き意味あるにあらず今日生れて眠食するも戲にして明日病んで死するも戲なれば死生は意に介するに足らざれども尙ほ其生を欲して死を惡むは人情の本來にして夢の如き戲を本氣に勉るものと云ふべし………事と品とに由りては生命を犧牲にするとさへありと雖ども其熱情の往來する間に時として心事を一轉して人生に常なきの原則を思出し吾身の正に是れ浮世の百戲中に居て人と共に一時の戲を戲るる者なりとのとを悟り得たらんには其熱するも唯熱に止まりて狂するに至らず名利の心をして法外に適かしむるとなきのみならず假令ひ事情に迫りて家を亡ぼし身を殺すに至るも自から安んずる所ある可し、之を名けて人間安心の法と云ふ、と。是れ懷疑的經世家たる三田翁の信仰なり、而して、翁は之を余傑の達觀なりと自負するものと見へ、中ごろに云く、右の立言は少しく高尙にして佛者の說に似たり宗敎に不案內なる老生の口よりするは不似合なれども佛者の意に適ふも適はざるも其邊は別問題として啻に火事病氣の時のみならず人間万事を隨時の戲としながら本氣に之を勉强苦辛するは欠く可らざる要訣なりと知る可し、と。憐れむべし、老先生未まだ人生の歸趣を知らず。敬宇中村翁臨終に死に對するの用意を人の問ふに答へ纖悔すらく、あゝ吾一生は四文八文の勘定を爲したるもの丶如しと。大家先生必らずしも「人」の運命を正知明解するものにあらず。

○國民政社

國民協會分れて、倶樂部と政社との二つとなりぬ、而して一伯一子は政社に入らずと云ふ、彼の伯は固より倶樂部に適すべし、品川子は何故初言の如く斷じて政社には入らざりし乎。されど、內實は共に同穴の人なるべし、たゞ其處作の依然として立憲政的ならざるを憾みとす。

○新大學惣長

前年加藤弘之氏、森文部大臣に服せず、則はち大學惣理を去らしめらる。今や、濱尾君入りて之に代の說ありと雖ども、豈よく新文部大臣と拮抗することを得んや。大學の積弊を擧げて、之を加藤氏の罪となし、氏去れば則はち大ひに改まるべしと思ふは誤まり也。吾黨は寧ろ、加藤氏を惜むもの也。

○漁夫の利

自由改進兩派端なく衝突したり。之に付き憫む可きは反對新聞の煽動策にぞある。もし感情と人品とを論ずれば、兩派は無論合同すべきものにあらず、其合同するは、吏黨又は國民派あるが爲めなり。左れば、反對派にして若し戰策を知るとせば、斯る時にこそ沈默し、もしくは其衝突を和ぐべけれ。斯してこそ眞正の煽動とは爲るなれ。然るに彼派愚にして其策玆に出でず。其正面の煽動あるに省りみて、兩派は反つて合同を强くせんとす。或人又曰く、之れ自由黨の策也、自由黨恰かも好く一怒し、巧みに改進黨を服用することを爲すと。あゝ、此等の策は吾黨の知る所にあらず。

○文部省改革

目下、即はち得がたきの幸機なり、今に於て猛然一斷せずんば、又何の日をか待たん。今の要は、剛骨の人を容るゝにあり、但だ河野には爲し難かるべし。とは、早稻田伯が一評ありとか、實にも、辻氏は次官を免ぜられて、久保田讓氏、之に代りたり。久保田氏が之に代るに比較して、辻氏何の罪ありや。島田三郎氏は云く、辻氏は公平誠實の士なりと、吾黨必らずしも信ぜず。然れど、二十年來左したる大破綻なくして文部に歷仕するは、既に其人物を證して餘りあらずや。但だ之を文部の次官として、日本敎育行政の大樞機を托するに於ては、何如んと案ぜられし耳。左れど此點より正直に評すれば、今の官員に何人か適任を得たるものありや。然りと雖ども、吾黨は、辻氏の辭職を惜むものにあらず、寧ろ其晚かりし

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

を悔むもの也、たゞ尤とも惜むものは、久保田氏が之に代りたること也。久保田氏某人を咎めず、如此き交迭は、何の改革にもあらざるが故也。

○非職郡長自殺

憫れむべし、石川縣郡長平野一芳氏は、去廿日鐵砲腹を切れり。主謀平々として、雜兵打死す。一將功成らずして、万骨徒枯る。あゝ、何事の必要ぞ。

○勅任布衣

最に中島信行氏全權公使として擧られ、近日亦た大石正巳氏辨理公使として擧られたり。共に、後藤伯と陸奥氏とに關係せる因縁よりすとは云へども、亦以て伊藤内閣の政針を察す可し。今一氣更に奮發せざる。

○攻撃と設計

坂垣總理、自由黨大會に於ける演説中に云く、

黨略上より申しますれば、我黨は初は先づ消極的の改革を遂げ然る後ち新設の事に及ぶと言ふ方針で有ましたが、我黨を攻撃して破壞主義を執る者であると謂を以て、右に攻撃を加へて、左に設計を示すを得策と致します。

左れば、自由黨の建設的議案は、此邊の趣向より出るものもありと見へたり。伯、又云く、

現内閣は、武斷派の一部と文治派との組織でありますが畢竟藩閥政府の元老の組織せしものにて依然たる情實政府であります、我黨は到底現内閣と争を開かんければ成りませぬ。

之れ寧ろ、自由黨の眞本色と謂つべし。

○大日本圖書會社の利益

同會社の資本金は五万圓なるが、此年上半季に於ける純益一万七千二百八十四圓六十七錢四厘にして、株主への配當は年二割二銖なりと、而して其支出費の中に、大日本教育會に義務契約として五百圓、引繼義務消却として四百七十圓餘の二項あり、外に五万圓の秘密金なるものを株金以外に備えありとぞ。同會社と、文部省出身の人々との關係あるものにや、無きものにや、分明ならず。

○書籍製造的學者

教育報知に、書林と學者との關係を示さんとて、左の一表を掲げたり、

金港堂書籍會社（社長原亮三郎）

三宅米吉　庵地保
加藤駒二　能勢榮
堀均一　渡邊政吉
山下安民　中根淑
池田藤之助

大日本圖書會社（委員長佐久間貞一）

伊澤修二　朝夷六郎
武田敬造　並木善道
安積五郎　大田資順

普及舍（社主辻太）

田中登作　西村正三郎
杉山文悟　橋本武
覺井諦曉

文學社（社長小林義則）

山縣悌三郎　松本貫
齋藤貞藏　榎本申之
石川匠作

集英堂（堂主小林八郎）

高橋熊太郎　前川一郎
永田茂　增山久吉
水島愼二郎

八尾書店（店主八尾新助）

岡村增太郎　若井源吾

博文館（館主大橋新太郎）

坪谷善四郎　鈴木倉之助

然らば、日下部三之介氏自身は何處に關係ありやと云ふに、そは文部省の御用にと答ふるもの多かるべし。

○每日新聞の古今佳話

近來の諸新聞大率ね舊新聞を以て其一部を埋む、此事、近年に在りては、每日新聞より創まりしか、同新聞近日揭ぐる所の「古今佳話」の一欄は、分けて見所あり。此欄蓋し島山子の筆に成るもの、着眼皆な、施政、修身の上よりす。故に、其事舊くして、其意皆な新、一々之を當世の用にす可らざるものなし、讀者意を注ぎて可也。

片々

可愛子

●安曇青年會　信州安曇郡地方の青年基督教徒相團結して、安曇基督教青年會を組織し、其事務所を豐科成相町安曇美以教會講義所に置けり、事務委員として三澤龜太郎、中村五一郎、小口靜逸、今井源作、相馬愛藏の五氏を撰べり、昨今會員兩三名づゝ隊を組み、各地方に於て傳道演說をなし居れりとぞ。

●愛知基督教青年同盟會　は蓋し好都合にて、過日來五名の入會者あり、會員某氏の如きは、同地に有名なる抹茶の宗匠なるにも係はらず、公回演說の都度下足番までせられ、其熱心忠實感ずべきものありといふ。

●四條教會青年會　京都四條教會の青年會は、僅々二十餘名の小團躰なれども、實地に教會の事業を裨益する事を旨とし、來會者の案內、教會の掃除等より、ランプを拭く事、庭を淸むる事、すべて進んで之に任じ、今は小使をさへ用ひざるとなれり、又他日教會新築の準備に供へんとて、月々少しづゝの金を集め居れり、此度同會の發起により、隔月一回の說教會を催ほして、專ら求道者を警醒する事となれり、去月十二日夜其第一回を開き、松山高吉、ケレー、兩氏の說教あり、百餘名の聽衆靜肅に傍聽せりと。

●大坂青年會秋期總會　は去月二十一日午後七時より、土佐堀青年會館に開かれたり。

●廣嶋基督教青年會館　今回山中百、吉田基治、坂本勉諸氏の發起にて、同市大手町三丁目七十一番地に青年會館を設け、廣く天下有志者の贊助を求め、金圓、書籍、新聞、雜誌等の寄附を乞ひ、左の概則に揭ぐる目的を以て運動せんとの計畫ある由、

廣嶋基督教青年會館概則

一　本館は靑年其他の有志者を以て組織し專ら基督教主義により德を修め智を研き及び傍ら社會事業に當るを以て目的とす
二　本館は哲學文學宗教等に關する講義及び演說をなす所とす
三　本館は英學部を置き高等尋常の二學科を教授する所とす
四　本館は諸種の書籍及び新聞雜誌の縱覽所を館內に設く
五　本館は機關として月刊雜誌を發行するを期す
六　本館は父兄の囑托により幼年子弟を寄宿せしめ其動學品行等の監督をなすとあるべし
七　本館は慈善的及び矯風的運動の常置本部となす
八　本館は他の同主義者の諸集會に時刻を限り會場を貸與するとあるべし
九　本館は書籍器具及び資金は寄附により維持するものとす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●東北學院の勞働會　は目下三十六名の會員を有し、左の事業に從事し、益々世の贊成を　て大に擴張する所あらんさすさ。
（一）牛乳　（二）牛肉　（三）新聞　（四）雜誌　（五）石油　（六）味噌　（七）醬油

通信

●南甘義捐金事件の顚末　本年四月南甘樂郡神川村罹災者救恤の爲め山田風外の名義を以て募集せし義捐金は同人及び上州社に於て其拂込を受けしにも拘はらず數月を經過するも未だ罹災地へ達せずさの風說一たび世上に傳はるや吾上毛靑年會は一片の義心默視するに忍びず百方之れが調査に從事し今や全く其局を結ぶに至りしに由り玆に其の顚末を明にし以て江湖に告白するさ左の如し

一　當初上州社に記者たりし山田風外は「非常の死を遂げし十四名の遺族を慰さめ及び重輕傷者災後の病人などの醫藥の資を補給せん爲め」特種救恤金を募集する旨上州新聞を以て廣告し尋で同新聞に義捐者の姓名金額等を揭載報告したり

二　然るに九月一日に至り「義捐金の行き方は如何」さ題し上毛新聞は實に左の如き事項を其雜報欄内に揭げたり曰く（上略）某新聞紙の如きは自分義捐金の募集を爲し麗々たる廣告を久しく其の新聞紙上に出したるにも拘はらず今に其金は送達無之樣子なり、聞く所に依れば某新聞社の會計が費消したりさか云々、而して上州新聞は其翌二日の紙上に於て「吾社は創立以來曾て一回だも義捐金の取扱を成したる事なし（中略）想ふに、彼れ上毛新聞の道ふ如きは夫れ或は其の當時吾社の記者たりし今日上毛新聞の記者某が取扱ひたる事實を移して以て吾社の信用を失墜せしめんさする慣手の毒筆にあらざるなきを得んや云々さ辨駁したり（此時風外は既に上州社を去て上毛社に居れり）

三　然るに上毛新聞に於ては更に三日の紙上に於て「シラ化の皮剝がれな」さ題し痛く上州新聞社に向て罵しる所あり果して何れが眞、何れが僞、何れが正、何れが邪なるやは確知するに由無しさ雖も若し該金の未だ彼地に到達せずさすれば義捐者の折角の義心も雲烟に附する次第遺憾の極なるを以て吾上毛靑年會は之れに對する處分法を議せんが爲め同日田中町天野藤園に例會を開き之を協議せしに滿場一致之れを調査するさに决し其事務は一切幹事に委托するさきなれり

四　右に付幹事は先づ調査の第一着手さして綠野多胡郡役所へ書面を發し此義捐金の着否を尋れたりしに六日附を以て山田風外及び上州社より義捐金を受領せしと曾て無之旨甲斐（郡長）小澤（書記）兩氏の名義にて回答ありたり因て更に罹災地即ち神川村救濟事務所に向ひ之れを尋問せしに八日附を以て上州社及び山田氏よりは未だ壹錢だも送付せられしさ無之旨宮前右太郞の名にて回答あり且其答書には上州社より該事務所へ送りたる文書の寫をも添付せり（其文意は山田風外より預りたる金圓は幸便にて送るべしさ云ふにあり）

五　兩所の回答斯の如くなる以上は該金の未だ送達せられざるや殆んど疑ふべからざるもの丶如し、是に於て九月十六日書を山田風外に送りて該金は果して送達せしや、又其の金額は如何等を問合せたるに風外は「本會の代表者に面會し事情篤さ相話したり畢竟上州社さ予さの交涉上彼れが使込に係るものなりさの旨を封皮に記して返付せり、因て本會幹事は更に書を送り口頭にては充分事實を盡さず且他日の證據さし難きに付手續書を回附ありたしさの意を申込めり、而して風外は該金は拂込を受けたる都度上州社なる桑原靜一、春山茂十郞、三俁愛策の三氏に預け置きたるに相違なく、殊に前橋市飲食店一同記名の分及び猫遊會出金の分は三俁愛策に手渡したるものなりさの意を縷々兩度に回答したり

六　爾後風外より上州社理事三俁愛策に對し該金行方の始末を談判に及びたきに付本會幹事にも立會を乞ひ對决したしさの旨を申送り愛策は之れを謝絕せし等の事あり、此等往復書面の寫は參考用さして本會に保存せり

七　斯して十月十二日に至り、上州社は書を本會幹事に寄せ該金の件に付依賴したき義あり來社し呉れよさ申込みたるに由り同夜幹事は同社に赴きたるに理事三俁愛策面接し、山田風外より直接に受取りし分及び友人より間接領收の分共合せて貳拾七圓九十四錢本會へ附托すべきに付本會より罹災地へ送達し呉れよさて目錄を添へて依賴せり、然れども此金に附ては全部なれば格別單に其一部のみを預り難き旨を答へ之を謝絕し、猶ほ風外さ立合談判を開かれたき旨を請求せしに篤さ協議の上確答すべしさのとにて其夜は引取り翌十三日立合談判は斷る旨を述べ昨夜依賴せんさしたる金額は今朝罹災地へ差送りたる旨の書面を上州社より寄せ來れり

八　其後十七日に至り山田風外は其預り居れる義捐金合計四拾圓拾六錢（内貳拾五圓六拾壹錢は上州社さの爭ひに係る金額なるを以て是れは裁判終結まで假りに拂ひ置く旨を以て救濟事務所へ交付せり）を全く罹災地へ送付し了り是に於て本件は全く其局を結ぶに至れり

上來叙述する所に由て義捐金の顚末は明瞭なるを得べしさ信ぜり、然れども本會が此件に對して拮据奔走せし所の理由に至ては猶少しく陳辨を要すべきものあり蓋し此人の窮厄に陷るに當り奮然起て其急に赴くは是れ義人の擧なり、況んや其窮厄の大にして一地方を擧て盡く悲慘の狀に沈淪せるをや、人誰か慘然さして爲めに腸を傷ましめざるものあらんや、南甘火災の如きは實に其の酷なるもの、是を以て義捐の擧あり、然るに其義捐の金にして中道に隱伏し罹災者に達せざる如き抑も何等の怪事ぞ、吾上毛靑年會不敏なりさ雖も亦た弊風を矯め汚俗を正すを以て任さする者なり、之れを聞くや以爲らく是れ德を敗り義を害ふの甚しきものなり、吾が主義さして默視すべきにあらずさ、乃ち奮然起て之が調査に從事し暫て其の顚末をして明らかならしめんさを期せり而して今や好結果を得義捐者は其の慈善の目的を達し罹災者は其の恩惠に浴するを得たり、本會の滿足之れに加ふる無し要する所本會が此事件に與れる只風を矯め俗を正すの意に出でしのみ豈に復た他あらんや。（上毛靑年會）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

クリスマスの贈物

は面白き勸懲繪草紙にして第一小供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土産遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢
郵送料二錢

其他

木村鐙子之傳	全一冊	正價金八錢	郵税金貳錢
子供のはなし	全一冊	正價金五錢	郵税金二錢
西洋女禮	全一冊	正價金拾二錢	郵税なし
看護婦美談	全一冊	正價金二十五錢	郵税金六錢
百人一首講義	全一冊	正價金貳拾八錢	郵税金四錢
淺瀨の波	全一冊	正價金三拾錢	郵税金四錢
蓬萊曲	全一冊	正價金八錢	郵税金二錢

發賣所 東京麴町區下六番町 女學雜誌社

正札引なし

新形流行

○はおり紐 品々
○帯留類 品々
○時計紐 品々
○メリヤス 品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製仕○御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舗 日本橋區よし町 佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

史海 第拾八卷

目次

◎日高見國……久米邦武君

此篇日高見國と題すと雖も上は有史以前に及び東は北米に及び西は匈奴よりホンガリーに及び我神代以後日本人種と蝦夷人種の爭等を序したる雄大なる長篇なり心を國史に注くもの一讀せざるべからず

◎豐國公と東照公……宮川鐵次郎君

秀吉家康の心術性行を序し、且其戰爭の方法に及ふ、十二分に二氏の履歴を知りて而して筆を舞はせり、故に流暢快適新文字と云ふべし

◎スタイン……東嶺野史

スタインの行爲益々佳境に入る

批評欄内 相變らず騷然たり ◎**挿畫** 毘沙門天

(定價)一冊金九錢。十冊前金七十五錢。市外は一冊に付郵税二錢増 ●毎月一回發兌

田口卯吉君著 從第一卷至第九卷

史海 日本之部

右初版賣切の處再版出來せり

●定價金三十錢 ●郵税六錢

東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

毎土曜日發兌

東京經濟雜誌

第六百五十一號目錄 十一月廿六日發兌

社説●阪谷文學士に答ふ(續)●自由黨の軍艦製造費如何●輸出税全廢を冀望するの主意書●地價修正論と富士の山●近世財政事情(續)●佐久間貞一君我が軍門に降れり

日本經濟家評論●熊澤蕃山(鶴城) **寄書**(三件) **雜報**(數件)

●銀行及商業之景況(數件)●官令(數件)

●定價一冊金七錢(市外郵税五厘増)

今や輸出税全廢論、地價修正論、地租輕減論等重要なる問題實に多し而して世論を動すに足るの議論は從來常に我經濟雜誌上に出でたる事は世人の知る所也故に何れの黨にも阿らず國會の議論を評論して其是非得失を明にするもの經濟雜誌に如くなし

東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

女學雜誌社出版書

子供のはなし 全

定價金五錢 郵税金貳錢

目次

第壹回 田舍音樂師
第貳回 葦の君
第三回 熊と旅人
第四回 風と日の喧嘩
第五回 ハイ〳〵トタヽイマ
第六回 カンとクッドの話
第七回 王にも勝てる人々
第八回 母の愛
第九回 柔順なる娘
第十回 英雄の所業

裏錦

毎月壹回
初號十一月
廿五日發行

雲隠れにし月には、秋の哀れも深く、霞を隔てゝこそ、花の色もまさるれ。これ眞美は、顯れずといへども、内に備はり、眞色は、外を掩ふといへども、内を隱すと能はさればなり。故に人に在りては、道徳の美は、内より外に發す。其内に在りて、能く出さゞるを上とす。内を先にし外を後にする者之に亞ぐ。性に就きて之をいはゞ、女子に於て、尤然るべし。貞操節義。皆これよりいでざるはなし。しかも此の如きの美は、在天至上者の寵靈を受け、其道を認得するに非ずんば、得難きなり。世の人は、女子教育の重きを知るといへども、眞心性を養ふべきを知らず。女徳の尊きを知るといへども、經緯道の倚るべきを知らず。譬へば、錦を織らんとするに、經緯の整はざるが如し。心の眞美、いかでかは顯るべき。本社は、玆に見る所ありて、一雜誌を發行し、基督教の本義に基きて、本邦婦女子の德性を養成せんと欲す。題して裏錦といふ。庶幾は覽る者をして、内美靈飾を修めしめんとなり。今や、秋氣漸く闌にして、霜葉錦を織るの期に際し、其初號を出す。冀くは江湖の淑女諸姉、講讀の榮を賜はらんとを

●裏錦の諸欄

第壹號目次○錦楓圖（木村香雨畫 鐵澄桂子讚）●祝詞 ●社説○裏錦の文釆 ●論説 婦女子の基督教的教育（北川貞行）裏錦の發刊につきて（五子）裏錦の初機（織々）●教訓 母訓○血漏婦のいえた○ろ話（佐藤秀六）○過去の疑問（白菊）●文藝 獨舟（中井履軒遺稿）蕉軒齋六○翁の遺稿○蘇氏織錦廻文記○歌の種類（さくらどの露）○万葉集歴史解（同）古今集評釋（同）近世歌評（同）織錦篇（洛陽五子）和歌十二首、小倉色紙 ●女小說 乳母選擇法○育兒要言（三眦）調理法數件、家計簿記、樋口五六、たち縫のこと（栗田米子）●小說 深山の紅葉（桐姬舍桂子）○模型人體（しらぎく）●批評 唐詩選評釋と批す ●雜筆 習慣の弊（錦子）筆○物の表裏（德子）竹窓偶感 小衣○裏錦發行の必要（郁子）

定價 壹冊六錢 六冊三十二錢 十二冊六拾錢 市外郵税壹錢

東京神田區駿河台
北甲賀町十三番地
尚絅社

鉄鵰居士末廣重恭君序
朝鮮新報記者青山好惠君著

仁川事情

定價一冊郵税共卅七錢

和裝美本全一冊美麗仁川港眞景寫眞入

仁川港ハ朝鮮西海岸ノ一大良港、居留日本人殆ンド三千、戸口殆ンド九百餘、宛然タル小日本ナリ、豈是レガ記ナカルベケンヤ、今ヤ四州生多情艶麗、剪紅截緑ノ筆ヲ以テ、此ノ濟物浦上ノ小日本ヲ細寫ス、其地既ニ奇、其筆既ニ妙、其書豈ニ一讀セザルヲ得ンヤ、末廣鉄鵰先生ノ序中ニ曰ク、「當港ノ沿革風俗人情ヨリ通商貿易ノ景況ニ至ル迄詳細ニ之レヲ記載シ一モ餘ス所ナシ余ヲシテ容易ニ仁川ノ實際ヲ知ルヲ得セシメシモノハ此書ノ賜ナリ」ト又曰ク、「此書世ニ出デ、廣ク我國ニ行ハル、ニ至レバ必ズ大ニ世人ノ注目ヲ惹キ起シ朝鮮ノ貿易ニ一層ノ勢力ヲ及ボスヤ疑ヒヲ容レズ豈ニ獨リ孤劍瓢然トシテ漫遊ス余ノ如キモノ、見聞ヲ利益スルノミナランヤ」ト以テ本書ノ價値ヲ知ルヲ得ベシ、敢テ世人ノ愛讀ヲ俟ツ。

發行所

朝鮮仁川港
各國居留地
朝鮮新報社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

東洋自由黨機關新聞

新東洋

定價

一部金貳錢郵税一部金五厘
壹ヶ月郵税共金拾錢郵劵代用五厘劵にて一割増總て前金にあらざれば發送せず

發行所（移轉）
東京々橋區元數寄屋町壹丁目壹番地
新東洋社

發行之大主眼

『第壹』吾黨が經天緯地の原則たる自由の大主義に依り、帝綱の恢擴民權の伸張及び內外經綸に於ける革新的運動の方針を公示し、以て大に同志を天下に糾合するに在り。

『第貳』百般政治上の現象は、電眼的觀察、細大洪纖剖析餘力を餘さず、務めて照破透徹を期するに在り。

『第參』朝野の形勢都鄙の狀況確實に報道し、吾黨同志の間に於て事情壅滯の蔽障を除き、本支運動の靈活を謀るに在り。

每日曜日發行

第九號

十一月廿七日發行

吾黨五ヶ條の**政綱**を解釋せる者國家內外の大經綸策を講明して意氣が滔々たる群政黨の上に毅然卓立する所以瞭として火を視る如し

普通撰擧は卑屈軟弱なる國會を革新する方法の一たる普通撰擧を說て懇且詳是吾黨の素論亦識者の腦漿を費す可き大問題

貧民勞働者**保護策**は『農學士柳內義之進君稿』親愛摯實の論零丁孤苦流離間關飢寒に號泣する可憐の同胞に對する眞情の迸合せるもの眼底涙ある人一讀の煩を避くる勿れ

靑梅煮酒**談**曹阿瞞大耳兒に語て曰く天下の英雄は我と君のみと今日英雄果して誰かある『白衣冠人』先づ三國史中旋乾轉坤の英雄を擒捉し來て或は嬉笑或は哭泣せしめ而後此題に及んとす讀了一番誰か快飮三斗せざらん

七幅瘂主**人**『圓光稿』明人傳遠度傳なり峻沈奇落晃瀚天を叩き地を斫るの大男兒勃然紙表に起つ**回顧**是れ米國社會小說家の泰斗ベラミーの著廿世紀の到頭に立て遙に現世紀を回顧し大破壞せりと斷案せる絕奇絕大の一篇『今如來』が譯文亦靈活精透能く原書の神髓を傳ふ

時事疊瀾凱切痛快**嬉笑怒罵**寸鐵殺人

奇警驚世**黨報**精細明確**外報**宇內形勢在一目中**殖產**實業家好侶伴**每號附錄**百苑爛慢たる文苑あり侃々諤々たる寄書あり歌哭鬼啾の文壇穴探あり珍奇變妙なる都鄙雜纂あり總て是れ有數絕快なる一幅此箇好新聞**新東洋**發兌日尚ほ淺きも社運益々旺盛旭日昇天の勢ある洵に以なきにあらず江瀨君子幸垂愛顧焉

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

社告

歳暮。書籍呈上廣告

本年初夏女學雜誌改正いたし、新規御購讀者增加致候に付、少さか祝意と感謝を表せむが爲めに、此度左に書籍を進呈致候。

十二月廿日迄に女學雜誌前金御拂込の向へは

拾三册前金御拂込口へつれ〴〵草講義。文法口授。植物學講義。木村鐙子の傳。婚姻論。の內御望の書籍一部進呈。

貳拾六册前金御拂込口へ鈴木弘恭大人著の四版百人一首講義一部進呈。

五拾二册前金御拂込口へ御高評を得たる若松賤子譯の再版小公子一部進呈。

右は社運隆盛の祝として、微か弊社が、年來の御愛讀に酬ひむため、詮する所ろ、世上花客多きの故に御座候、爰に謹で御愛讀諸君に謝し奉候。

東京市麴町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

牧畜雜誌

第九拾三號

●目次

○論說

○牧牛辨解(承前)　獸醫學士　佐藤清明

○雜錄

○ゼルシー種牛の圖解○牧塲のかこひ○牛蝨の簡易驅除法○鷄の潰瘍○佛國の養鴿○牧草略說(承前)○三春產馬沿革の概略○新冠御料牧塲の情況○二府三縣屠獸數○長崎縣下の養鷄數○牝犢共進會○香川縣家畜共進會及牛馬市○東京獸醫免許試驗○福島通信(○明治廿五年本縣下種牡馬數○本縣舊各藩に於て飼養せし乘馬數○白河町馬市景况○田村郡二歲牡馬糶市)○牛疫彙報○東京府下の牛疫兵庫縣下の牛疫○大分縣下の牛疫○大阪府下の牛疫○奈良縣下の牛疫○獸疫費)

○統計

○畜產物輸出入三ヶ月間對照表

○講話

○牧羊の栞(承前)　山陰牧翁稿

○寄書

○南洋の島廻(其七)　藤井米八郎

○罨丸割去術(接第九十號)　北濵生

○惑を解く　備中　秋田生

○問答

○燕麥の件に付き質問の答○乳牛冬飼料の件に付き質問○煉乳製造法質問○豚の旋毛蟲の件に付質問○牛疫の件に付き質問

東京日本橋區吳服町三十二番地　**牧畜雜誌社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

再版

（リットルロードフォントルロイ）

小公子

巖本善治妻譯

小供のよみ本

クリスマスの贈物

森田思軒居士の批評

（前略）又た若松賤子を得たり「小公子」の若きは小生竊かに推して廿年來第一の譯となす唯一と云ふに非ず第一の等列に在るべきを云ふなり「離縁」は驟かに之を看れば少しく「小公子」に遜るに似たり然れども之を邦語に移すに當りて「フォントロイ」と「カバフヒールド」とは其事其文兩ながら難易甚だ同じからず遽かに軒輊す可からざるなり。（早稻田文學第二拾三號）

（批評）○十一月十五日讀賣新聞○經濟雜誌五百九拾八號○巖谷季雄君○十一月十三日報知新聞○十一月十七日中央新聞○早稻田文學四號○國民の友百卅八號○十一月廿六日國民新聞○十一月十七日中正日報○亞細亞廿二號○護敎廿二號○下田歌子君○中島俊子君○石橋忍月君○一月十六日自由新聞。

定價金三拾八錢の所今回クリスマスの贈物として特別

金廿八錢（郵税金八錢）に引下候間續々購求被下度候

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

轉居

麹町區下六番町六番地明治女學校内

右在寓土曜日午后ヨリ水曜日午后迄

迎接日

毎火曜日午后三時ヨリ

退養

水曜日夜ヨリ土曜日午前迄ハ王子ニ退養シ事務上ノ來訪ヲ謝絶シ且ツ書信ヲ受ズ命用ノ人ハ下六番町ノ方ヘ土日月火ノ四日ノ内ニ御申越ヲ請フ

巖本善治

一書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增に限る
一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃さも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

		前金	府外
十冊	前金	五十八錢	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

		前金	府外
六冊	前金	三拾五錢	三十八錢
十三冊（半年）	同	七拾三錢	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	一圓四十三錢

一冊 金六錢　郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金 拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會合等の記錄を掲くるものにて一切無料さす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さ定む。

東京市麹町區下六番町六番地

發行所　**女學雜誌社**

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三